

青森市埋蔵文化財調査報告書 第16集

山吹(1)遺跡

発掘調査報告書

平成2年度

青森市教育委員会

序

近年、全国的に大規模なリゾート開発をはじめ各種の大地を対象とした土地開発事業が急激に増加してきております。

こうした土地開発事業計画の急増する状況は、青森市においても、その例にもれず、大規模リゾート開発計画をはじめとし従来から進行してきている宅地開発や工場・道路等の建設など市内における多種多様な土地開発計画は、近年特にその増加率を急激に上昇させてきております。

この増加を続ける土地開発事業は、未来に向って当市の都市化・活性化を推進する原動力となり得るものと思われませんが、一方において、先人の築いた貴重な文化遺産である埋蔵文化財にとりましては、重大な危機に直面しつつあるという憂慮すべき事態と言えます。

このような現状をふまえ、当市の埋蔵文化財保護・活用を円滑に対処すると共に、より一層の推進を図るため、当教育委員会では、平成2年度に社会教育課内に埋蔵文化財係を新設し、その業務に取りくんでまいりました。

平成2年度、当教育委員会では、市内大別内に所在する「山吹（1）遺跡」の発掘調査を実施いたしました。調査の結果、本遺跡は、縄文時代中期の大規模な集落跡であることが判明したと共に、当時の生活を知り得る貴重な資料も数多く得ることができました。

本書は、こうした発掘調査の成果をまとめたものでありますが、ここに本書を刊行することができたことは、文化庁・県教育庁文化課はもとより、調査員をはじめとする関係各位の御指導さらには地権者西田憲一氏並びに地元大別内町会各位の御協力の賜ものによるものと、ここに深く感謝の意を表する次第であります。

最後となりましたが、本書が研究者はもとより市民各位にとりまして、青森市の歴史を紐解く鍵として、さらには文化財保護啓蒙にいささかでも役立つことができますよう念じる次第であります。

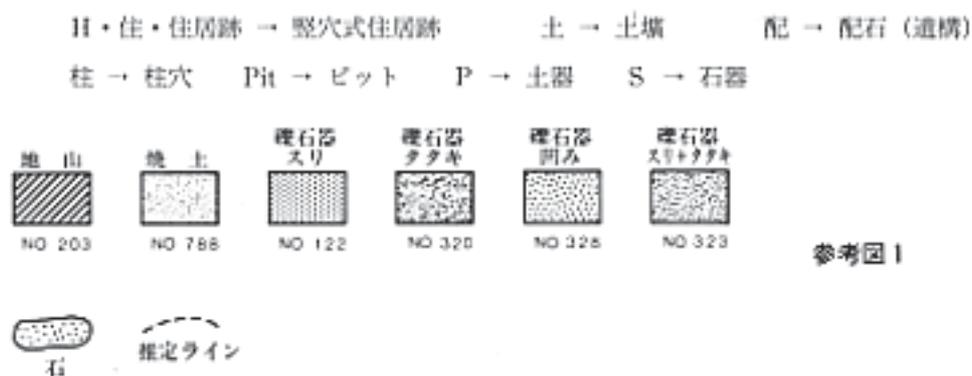
平成3年3月

青森市教育委員会

教育長 花 田 陽 悟

例 言

1. 本書は、平成2年度に発掘調査を実施した青森市大字大別内に所在する「山吹(1)遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、当該地を現状の畑地から杉林への地目転向による造成工事中に遺跡が発見され、工事により遺跡が破壊・消滅してしまう恐れが生じたため、地権者と協議のうえ、工事の中断・延期の措置を構じ遺跡の記録保存として実施したものである。
3. 発掘調査及び本報告書作成は、国・県の補助金交付を受けて遂行したものである。
4. 本報告書の執筆・編集は、文化庁・県教育庁文化課・調査員の指導を受け青森市教育委員会が行い、執筆者については各々文末に付した。
5. 出土遺物及び記録図面・写真等関係資料は、現在、青森市教育委員会で保管している。
6. 本報告書に掲載した図版の縮尺は、各図版ごとに表示してあるが、表示のない図版は任意の縮尺である。なお、写真図版の縮尺については、統一を図っていない。
7. 本報告書に記載した色調に関する表記は、農林省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』5版1976に基づいている。
8. 本文中及び図版・表において使用した略称・記号・スクリーントン等の表示内容は、次のとおりである。



9. 発掘調査の実施にあたっては、調査地区地権者西田憲一氏及び大別内町会長西田宗一氏をはじめとする町内会の多くの方々に御協力をいただき、また、発掘調査並びに本報告書作成にあたっては、次の機関・諸氏に御指導を賜った。ここに深く感謝の意を表する次第である。

(敬称略・順不同)

文化庁・青森県教育庁文化課・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県立郷土館・八戸市教育委員会・弘前市教育委員会・秋田市教育委員会・青森山田高等学校

岩田 満・岡田 康博・岡村 道雄・木村 功・工藤 竹久・小松 正夫・坂本 洋一・佐藤
るみ子・塩谷 泰洋・白鳥 文雄・鈴木 克彦・田沢 淳逸・成田 滋彦・菅田 実・三宅
徹也・村越 潔・山口 義伸

目 次

序

例 言

目 次

第Ⅰ章 調査の概要	□ 1
第1節 調査に至る経過	□ 1
第2節 調査要項	□ 1
第3節 調査方法	□ 2
第4節 調査経過	□ 3
第Ⅱ章 遺跡の概要	□ 5
第1節 遺跡の位置と地形	□ 5
第2節 周辺の遺跡	□ 5
第3節 遺跡の基本層序	□ 8
第Ⅲ章 調査の成果	□ 9
第1節 検出遺構	□ 9
1. 竪穴住居跡□	□ 9
2. 土壌□	18
3. その他の遺構□	26
第2節 出土遺物	28
1. 土器□	28
2. 石器□	37
3. 土製品・石製品□	58
まとめ	61
写真図版	63

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査に至る経過

□ 平成元年の春先のこと市内大別内に在住する西田憲一氏が、自己所有地である大別内字山吹の丘陵地上に所在する畑地を杉林とするため、重機で表土を削平していたところ、その排土中から多量の土器片が発見されたとのことであった。西田氏がこの土器発見の対処に苦慮されていた矢先、日本考古学協会会員でもある青森山田高等学校教諭の葛西励氏が偶然この地を通行中、その現地の状況を実見することができ、事の重大性及び緊急性から青森市教育委員会にその旨を連絡された。連絡を受けた市教育委員会では、早速県教育庁文化課に連絡をとり担当職員の同行を願って現地に赴いた。

現地視察の結果、当該地は、多量の遺物が出土していること、削平面に当時の炉跡や遺構らしき輪郭が確認できること等の諸観点から、明らかに縄文時代の遺跡の一部であることが判明した。そして、この地が遺跡であると判明し、かつ新たに発見された遺跡であることから、当該地を含めた遺跡の範囲を推定し、そこを小字名をとり「山吹 (1) 遺跡」と遺跡名を付すこととし、同時に県の遺跡台帳に登録することとした。

現地視察の後、市教育委員会では、当該地がこのまま工事を継続すれば遺跡の破壊あるいは消滅の恐れが生じることから、地権者である西田氏と今後の対応について協議することとした。

幸いにも西田氏は、埋蔵文化財に対し造詣が深く、工事の一時中断及び発掘調査の必要性についての協議は進展し、氏の御理解と御協力により、工事は一時中断することとなり、平成2年度に緊急の発掘調査を実施する見通しが立った。

そこで、市教育委員会では、早速本遺跡の発掘調査実施に向け準備体制を図ると共に、この発掘調査を国及び県の補助金を受け実施したい旨を県文化課に申請することにした。以上の経過を経て、本遺跡の発掘調査は、遺跡の記録保存として平成2年度に青森市教育委員会が主体となって実施することとなった。

第 2 節 調査要項

1. 調□ 査□ 目□ 的 個人所有畑地の植林造成工事に先立ち、当該地区に所在する遺跡の発掘調査を実施し、記録保存を図るとともに、地域社会の文化財活用に資する。
2. 遺□ 跡□ 名□ 称 山吹 (1) 遺跡 (ヤマブキ県遺跡台帳登録番号 01186)
3. 遺跡所在地 青森市大字大別内字山吹 117 - 19 (西田憲一氏所有地)

4. 調査期間 平成2年6月4日～平成2年7月31日
5. 調査対象面積 1, 580 m²
6. 事業主体者 青森市
7. 調査担当機関 青森市教育委員会
8. 調査体制
- | | | |
|--------------|----------------------------------|-----------------------|
| 調査員 | 葛西 励 | 青森山田高等学校教諭 (日本考古学協会員) |
| | 高橋 潤 | 〃 (〃) |
| 調査事務局 | 青森市教育委員会 | |
| 教育長 | 花田 陽悟 | |
| 理事・教育次長 | 工藤 昌保 | |
| 社会教育課長 | 寺沢松三郎 | |
| 〃 課長補佐 | 久世 満正 | |
| 〃 主幹兼埋蔵文化財係長 | 遠藤 正夫 (調査担当) | |
| 〃 主査 | 広瀬 賢治 (〃) | |
| 〃 主事 | 上野 隆博 (〃) | |
| 調査補助員 | 後藤 久志・秋元 宏之 | |
| 整理作業員 | 金山 晃道・土橋 弘美・石文 員子
吉田 禮子・宿野部康江 | |

第3節 調査方法

1. 調査区域の状況

調査区域の範囲は、ほぼ南北方向を指す約24mの短辺と、ほぼ東西方向を指す約68mの長辺に囲まれた若干いびつな長方形を呈しており、その面積は、約1, 600□である。地形的には、西側半分の一帯がほぼ平坦な面となっており、東側半分が西から東に向かって緩やかな傾斜面となっている。

調査区域は、すでに重機により表土が削平されており、ローム面が露呈した状況であった。そのローム面及び削平された排土の盛土中には、多量の遺物が散乱していた。

2. グリッドの設定

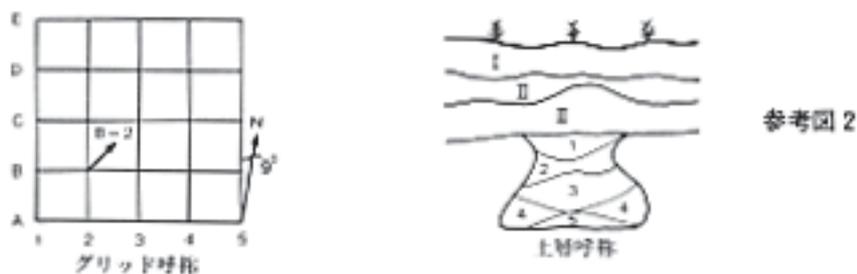
グリッドの基準ラインの設定は、調査区域が、ほぼ東西・南北方向を指す四つの辺で囲まれた方形を呈し、西側の短辺にほぼ平行して走る直線状の農道が走っていることから、この農道に平行する任意のラインを1本設けることから始めた。そして、このほぼ南北方向を指すラインに直交する任意のラインをさらに1本設定し、この東西・南北の両ラインを基準に4m四方

のグリッドを順次設定していった。南北方向を指すラインは、磁北から9度西にずれている。

各ラインには、南北ラインについては南から北へA・B・Cとアルファベットを、東西ラインについては、西から東に向かって1・2・3と算用数字を各々付し、各グリッドの呼称は、参考図のとおり直交する交点のうちの南西交点の各々の記号の組み合わせとすることにした。

3. 土層の呼称

参考図のとおり、自然堆積土層については、上位から下位へI・II・IIIとアラビア数字を、遺構内の堆積土については同じく上位から下位へ1・2・3と算用数字を付すこととした。



4. 遺物の取り上げ

出土遺物のうち、遺構内のものについては、原則としてレベル・ポイント・出土層位を記載し、場合によっては微細図を作成したり写真撮影を行い取り上げることにした。遺構外のものについては、前述のとおり、重機によりローム面まで削平された状況であったので、一応グリッド単位で一括して取り上げることにしたが、それらの大半は、原位置から移動している可能性が高いものである。なお、削平による排土の盛土中に散在していた遺物については、表採として取り上げることにした。

第4節 調査経過

本遺跡の発掘調査は、晴天に恵まれた平成2年6月4日に開始した。初日は、現地で担当職員と調査補助員及び発掘作業員とで簡単な打ち合わせを行った後、環境整備や器材仕分けあるいは、作業器材等保管小屋作り等の作業にとりかかった。翌5日からは、重機により高く盛土された排土中から散乱している遺物の拾い集め作業に取りかかった。7日からは、グリッド設定作業に入った。

6月中旬からは、調査区域西側の遺構確認作業及び遺構精査にとりかかった。この遺構に関する作業と併行して遺物の取り上げ作業も進めていった。

7月上旬になると、およそ0～5ライン間の遺構精査が完了したので、その範囲に10ライン付近の排土の盛土を移動する作業に入り、同時に遺構確認及び遺構精査も進めた。

7月中旬になると、4～10ライン間で柱穴や炉が多数検出され、全員が多忙を極める毎日となった。11ラインより西側には、遺構が存在しないことも次第に判明してきた。23日には、それまで、中断しながらも継続してきた排土の移動作業も完了することができた。

7月下旬になると、全員が遺構の精査及び図面作成に従事する毎日となった。24日には青森市文化財審議会委員が、26日には青森市教育委員が各々現地視察を行った。

7月31日、すべての調査を完了し、器材等の清挿及び環境整備を行って、無事に発掘調査を終了することができた。

(遠藤 正夫)

第 章 遺跡の概要

第 1 節 遺跡の位置と地形

青森市は、地図上でみると青森県のほぼ中央部にあたり、およそ東経 $140^{\circ} 45'$ 、北緯 $40^{\circ} 49'$ に位置している。

地形的にみると青森市は、陸奥湾に面した北側の市街地を含む平野部と、それを東・西・南の3方でとり囲む形での山岳地帯とからなっている。

青森平野は、市南方にそびえる標高千メートルを超える八甲田連峰を源とする荒川・駒込川をはじめとする大小多くの河川によって形成された沖積平野である。

この八甲田連峰が高度を下げ青森平野部に達する裾野付近には、南北に走る河川・小谷に沿って標高 $50 \sim 200\text{m}$ の低位丘陵が北に向って細長く幾条にも分岐して発達している。

本遺跡は、これら八甲田山系裾野に形成された舌状の低丘陵地上に位置しており、この丘陵は、西側の荒川と東側の小谷とにはさまれている。

本遺跡の位置は、県道酸ヶ湯高田線で見ると、野沢町会を通りさらに南下し、丁度横手町会付近で荒川を隔てた東側向いの丘陵地上にあたる。なお、ほぼ同一場所から逆に西側を仰ぐと眼前の丘陵地上には、縄文時代後期の環状列石を主体とする「小牧野遺跡」が所在している。

一方、市営バス路線で見ると、高田線大別内行きを終点である大別内停留所から大別内町会を通り抜け、山道に入り、そこから約 1km 南に進んだやや平坦な地に本遺跡は所在している。

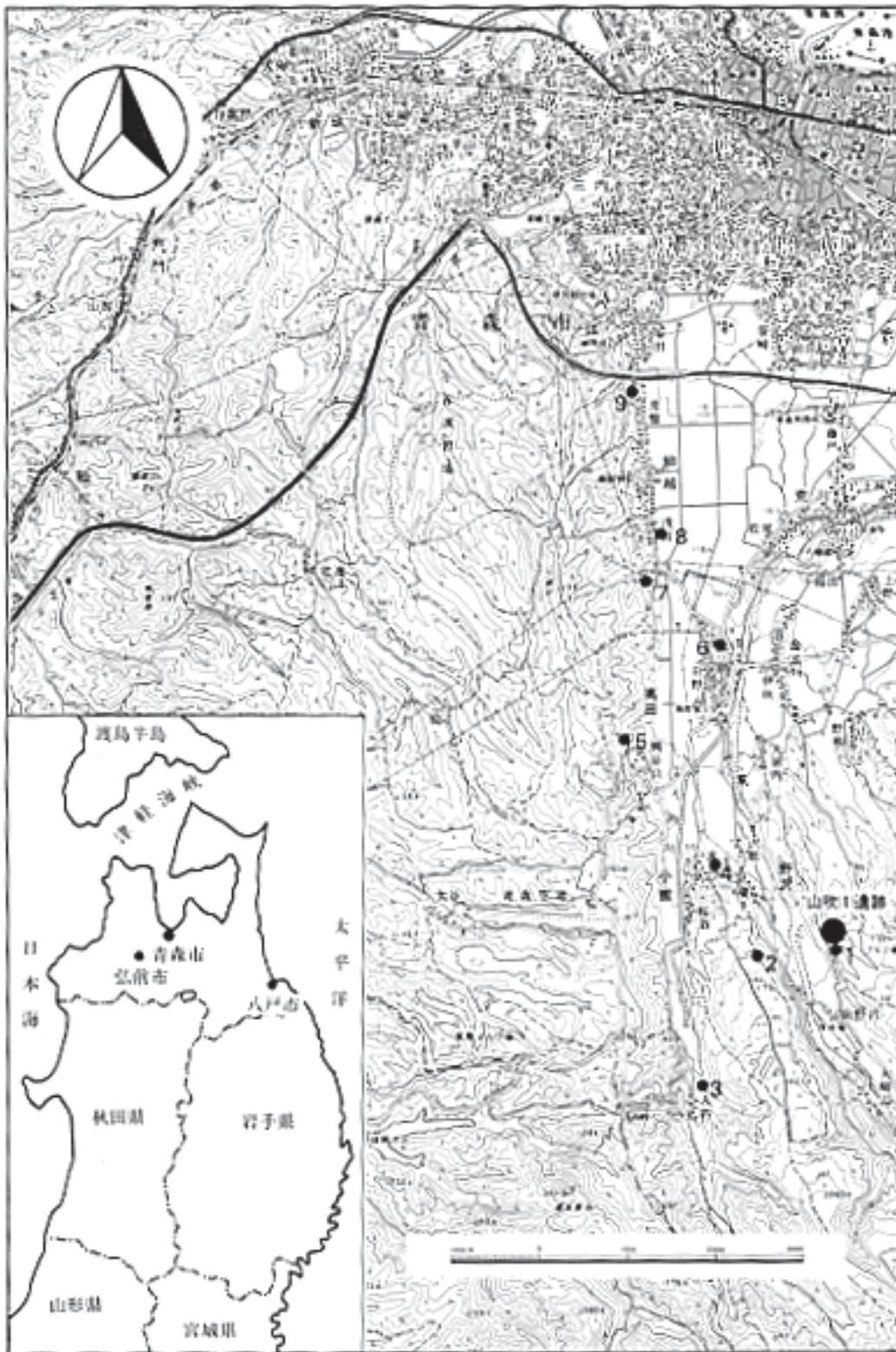
遺跡付近一帯は、南北方向がほぼ平坦で、東西両側は各々ゆるやかな傾斜をみせており、畑地と杉林となっている。調査区域は、西側から東側に向って若干傾斜した地形となっており標高は、約 $100 \sim 98\text{m}$ である。

(遠藤 正夫)

第 2 節 周辺の遺跡

平成元年度現在、青森市内には187箇所の遺跡が登録されている。これらの中には昭和8年喜田貞吉博士、昭和42年江坂輝弥教授によって発掘調査され、学術的に非常に貴重な積石塚組石棺基を検出することができた山野峠遺跡、「永録日記」「栖家の山」といった文献の中に、土偶、土器等の出土が記されている三内遺跡、青森県内では稀な縄文時代晩期の貝塚を伴った大浦遺跡、縄文時代早期から歴史時代まで各時代の人々が生活を営んでいた蛭沢遺跡といった著名な遺跡が含まれている。

青森市は、西の津軽脊梁山地、南の八甲田火山地、東の東岳山地といった山岳地帯と、それらに囲まれた青森平野を中心とした平野部からなっている。遺跡の分布状況を見ると、山岳地



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

帯と平野部の接する低丘陵地上に数多く見られ、平野部をとり囲んでいる。遺跡の密度から見ると、三内地区、油川地区、後潟地区に集中しており、東部地区よりもはるかに西部地区が密度は高い。

山吹(1)遺跡は、八甲田山系裾野の荒川東側の青森平野に突出した舌状の低丘陵地に位置するが、比較的この周辺は遺跡が希薄な地区である。しかし、旧荒川村の頃より本遺跡周辺の台地は縄文時代中期及び後期の遺物が出土することで知られており、大別内南方の本遺跡が所在する山麓を横平(よこたち)と、また、横平の南西の山麓を叭平(かますて)と呼び、この二つの山麓を併せ「滝ノ沢遺跡」と土地の人は称している。これらの諸点から推察すると、この台地には未発見の遺跡が存在すると思われる。今後は文化財パトロール及び分布調査等により、遺跡の所在の有無を明らかにしていきたい。

本遺跡周辺の縄文時代の遺跡は少なく、山吹(2)遺跡、小牧野遺跡、入内遺跡が所在する程度である。ただし、入内町会北東側の台地にあり、縄文時代前期の遺物が出土した入内遺跡は工事のために消滅している。また、山吹(2)遺跡であるが、山吹(1)遺跡の南側にほぼ隣接している遺跡であり、遺跡台帳によると出土遺物が縄文土器片となっており、詳細は不明ではあるが、地理的環境から考察すると、山吹(1)遺跡と同一集落の可能性が高いといえる。

本遺跡が位置するこの台地の西方に、隣合った形で荒川と入内川に挟まれた舌状の低丘陵地があるが、この台地の標高140m付近に小牧野遺跡が青森市街地と陸奥湾を一望することができる場所に位置している。この遺跡は、平成元年度に山田高等学校考古学研究会によって実施された学術発掘調査において、保存状態が極めて良好な形で直径約35mの2重(3重)構造の環状列石を検出することができた。保存状態が良好であると同時に、個々の配石が全国的にも類例のない特異性を認めることができ、環状列石の目的及び性格をより明確な形で把握することができるのではないかと考えられる。平成2年度から当委員会が調査に当たっており、平成4年度に報告書刊行の予定である。

次に青森平野を南北に走る入内断層周辺の遺跡を見ると、城館及び平安時代を中心とした歴史時代の遺跡が多い。中世城館では、小館、高田蝦夷館、高田城、細越館等が、複合遺跡では青森県教育委員会が発掘調査した細越遺跡と朝日山遺跡が所在している。

細越遺跡は、細越町会の西方約300mの水田地帯に位置する。昭和52年度の調査によって、縄文時代晩期の遺物と平安時代の竪穴住居跡が検出されたが、住居跡からは腐食しきらずに残った建物遺材がみつき、建物の上屋構造の一端を解明している。

細越遺跡の南西の段丘に位置する朝日山遺跡は、昭和57年度と平成2年度に調査が行われ、平安時代の集落跡を中心に、縄文時代、弥生時代の遺物をも出土している。特に平成2年度の調査においては、青森県内では貴重な室町時代の掘立柱建物跡が相当数検出されており、この時代の住居構造を知ることができる好資料である。平成3年度も調査の予定である。

前述したこれらの遺跡を第1表にまとめておく。

(上野 隆博)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	種類	時代	備考
1	山吹2遺跡	01187	大別内字山吹	散布地	縄文	
2	小牧野遺跡	01176	野沢字小牧野	包蔵地	縄文後期	「青森市小牧野遺跡発掘調査報告」
3	入内遺跡	01025	野沢字入内	散布地	縄文前期	消滅
4	小館	01172	小館字桜刈	城館	中世	
5	高田蝦夷館	01171	高田字朝日山	城館	中世	
6	高田城	01170	高田字日野	城館	中世	
7	朝日山遺跡	01165	細越字朝日山	集落跡	縄文～歴史	「朝日山遺跡発掘調査報告書」
8	細越遺跡	01013	細越字千種	散布地	縄文晩期、平安	「細越遺跡発掘調査報告書」
9	細越館	01066	細越字梁山	城跡	古墳、中世	

第3節 遺跡の基本層序

調査区域内における土層の観察は、調査区域境界の露呈している壁面を利用することとした。調査区域内の基本層序の概略は、以下のとおりである。

第I層：表土

10YR5 / 2 灰黄褐色土

耕作土のため人為的に攪拌を受けパサパサしている。層厚は平均20cmである。

第II層：遺物包含層

10YR3 / 3 暗褐色土

腐食した草根も含まれ若干しまりが弱い。

第III層：漸移層

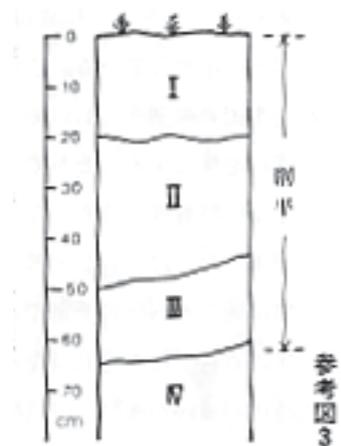
10YR5 / 6 黄褐色土

第II層と第IV層の混合土質でありしまりが強い。若干ロームブロックが含まれている。

第IV層：ローム層

10YR7 / 6 明黄褐色土

地山としたローム層である。



(遠藤 正夫)

第 章 調査の成果

第 1 節 検出遺構

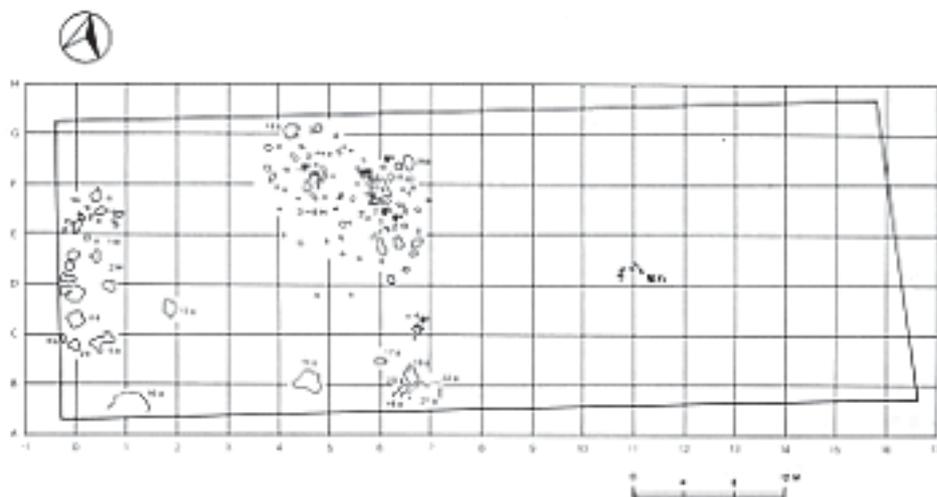
本遺跡の発掘調査は、工事中に新たに発見された遺跡の緊急保護措置として記録保存を目的として実施されたものである。従って、調査着手時の調査区域内は、既に重機により表土が削平され、基本層序第Ⅳ層としたローム面が現地表面として露呈した状況であった。

このような状況下での発掘調査であったことから、削平され露呈したローム面には、既に遺構らしき輪郭が所々で現われていた。しかし、その輪郭を確認できたローム面は、遺構構築時の生活面より大分掘り下げられた面に相当しているため、ほとんどの遺構の開口部は欠失していることを意味するものである。実際、精査を進めてみると、竪穴住居跡と推定できる箇所では床面が欠突し、土壌では開口部付近が同じく欠失していることが判明した。5基検出された石囲炉だけは、幸運にもほぼ原形の状態で検出することができた。

以上のような調査区域の状況であったことから、以下に記述する各遺構において、竪穴住居跡に関しては、柱穴や炉を判断材料とした推定の域を脱し得ない把握であり、土壌及びその他の遺構に関しては、全体の形状を知り得たものが皆無であったと言える。

1. 竪穴住居跡

すべて柱穴配置等を根拠とした推定による竪穴住居跡としての把握であり、推定総計は、8



第 2 図 遺構配置図

軒である。1・2号の2軒は、C・D・E—(一)1・0グリッドの範囲において、3～8号の6軒は、E—5グリッドを中心に約150□の範囲のなかで各々確認(検出)した。なお、後者の6軒を検出した範囲においては、それらの把握があくまでも多数検出された小ピットの中から配置関係・規模・覆土さらには炉との位置関係等において竪穴住居跡の柱穴と判断できるものを選定し、その結果として6軒の竪穴住居跡の存在を推定し把握したということであり、このような観点からすればこの範囲内には、6軒以外にも推定でき得る竪穴住居跡が存在している可能性を否定することはできない。

また、この3～8号の6軒の位置する範囲以外でも、竪穴住居跡を想定できる可能性は高く、事実、次の土壌の項で取り扱うこととした3・6号及び19・20号の土壌は、各々一軒の竪穴住居跡の柱穴と考えることも可能である。(この4基の遺構については、竪穴住居跡の想定も可能ではあるがその根拠が乏しすぎるため一応土壌として扱った。)

第1号竪穴住居跡 (第3図)

[位置] E—(一)1・0、D—0グリッドで検出した。

[確認状況] 17個の柱穴状を呈する小ピットと、それらのほぼ中心部に位置する焼土を検出した。小ピットのうち、幾つかのものは、ほぼ円形を呈している。

[規模] 床・壁面ともに欠失しており平面規模は不明であるが、柱穴間の計測を参考とすれば、直径4.5m前後の円形プランを呈するものと推定できる。

[床・壁] 両者ともに欠失している。

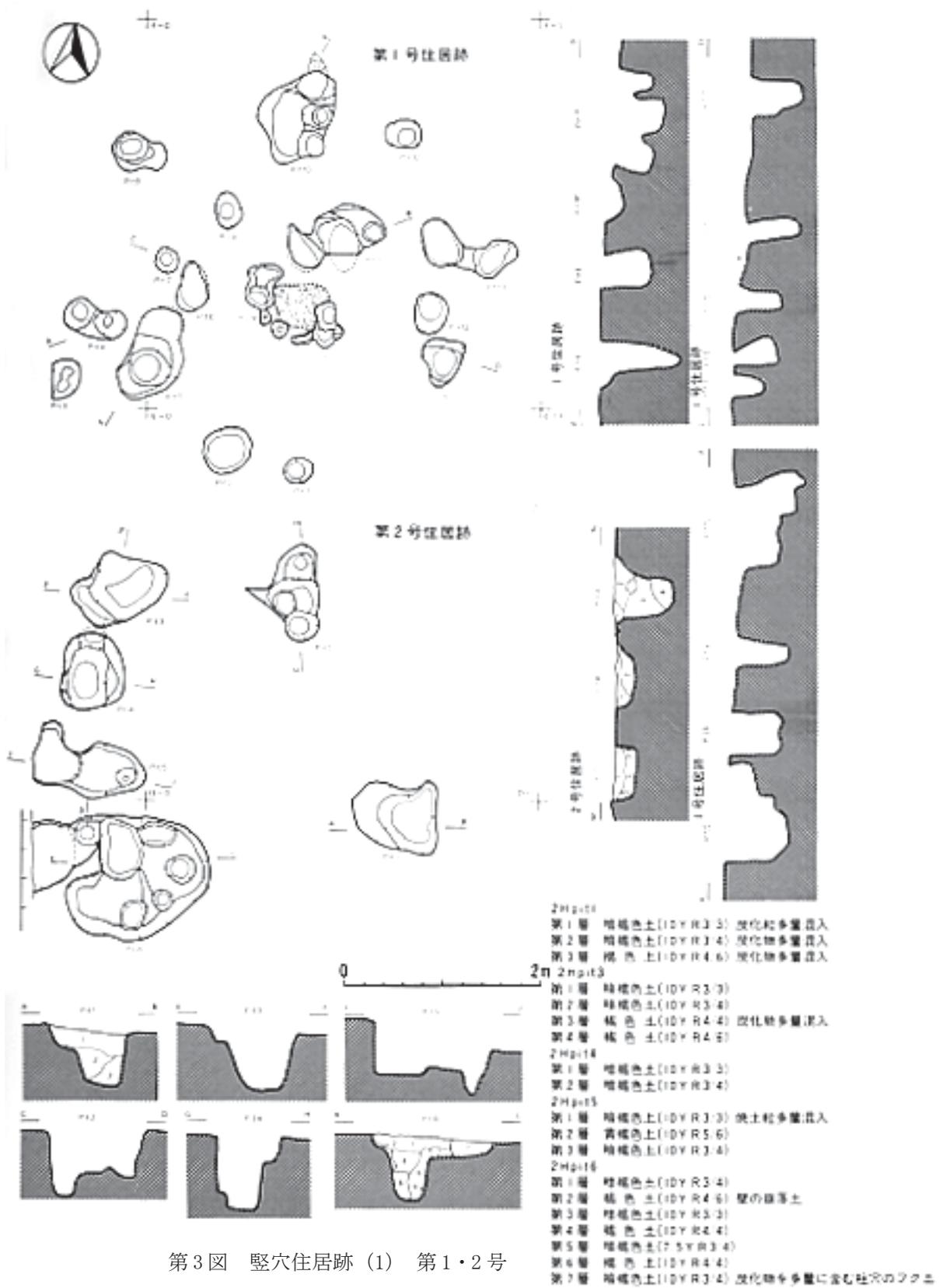
[堆積土] 床面下まで削平されているため堆積土は存在しない。(以降、8号竪穴住居跡まで、各軒すべて、床・壁・堆積土は存在しないため、記述に際しては、この3項目は省略する。)

[炉] 円形に周る柱穴のほぼ中央部に焼土が検出され、原位置を保持していたことから炉と判断した。焼土もやはり堅緻であったと思われる火床面は削平されており、その残存している厚さは、わずか数mmであった。炉の形態は、恐らく石囲炉と思われ、pit16・17の凹みはその石の掘り方跡と思われる。

[柱穴] pit1・2・4・5・8・10・12・13・15は、壁柱穴、pit6・9・11は主柱穴と考えられる。pit4・10・13の在り方から、本住居跡は、柱の建て替えを想定できる。

[出土遺物] pit4・5・7・8・10・11・13・14の覆土から各々5～10片の土器片が出土した。すべて器面が摩滅し細片ばかりであり、土器型式を特定することはできないが、縄文時代中期後半から後期初頭の時期と思われる。石器はpit11から出土した磨製石斧だけである。

[時期] 遺構の時期を決定し得る状況での出土土器がないため不明ではあるが、恐らく縄文時代中期後半から後期初頭にかけての時期と推定できよう。



第3図 竪穴住居跡 (1) 第1・2号

第2号竪穴住居跡（第3図）

〔位置〕 C・D—（一）1・0グリッドで検出した。

〔確認状況〕 小ピットが複数連結し1基の小ピットとして扱ったものも含め6個の柱穴状を呈する小ピットを検出し、それらは部分的に途切れるものの全体として円形を呈している。

〔規模〕 床・壁面ともに欠失しており平面規模は不明であるが、柱穴間の計測を参考とすれば、直径4m前後の円形プランを呈するものと推定できる。

〔炉〕 検出されなかった。

〔柱穴〕 pit1・2a・3・4・5a・6が壁柱穴と考えられるが、主柱穴と推定される中央部における柱穴は検出されなかった。なお、Pit2cも柱穴と考えられるが柱の建て替えによるものかどうかは不明である。

柱穴の深さは、確認面から平均60cmもあり、かつ、住居平面規模の割りにも不釣り合いな程太い柱穴である。

〔出土遺物〕 pit1～3の覆土から各々数片、pit4～6の覆土から各々少量の土器片が出土した。pit1～3の土器は、細片であり土器型式は特定できないが、pit4～6の各出土土器は、縄文時代中期後半の時期と考えられる。pit1からは不定形石器1点、Pit4からは石鏃1点、pit6からは不定形石器3点が出土した。礫石器は、出土しなかった。

〔時期〕 遺構の時期を決定し得る状況での出土土器がないため不明ではあるが、恐らく縄文時代中期後半から後期初頭にかけての時期と推定できよう。

第3～8号竪穴住居跡（第4・5図）

本節冒頭で記述したとおり、第3号から第8号とした竪穴住居跡は、多数の柱穴状を呈する小ピット群のなかから、柱穴配置・覆土・規模等を基に住居プランをあくまでも推定復原したものであり、確実性に欠けるため、各軒ごとではなく6軒を一括して記述する。

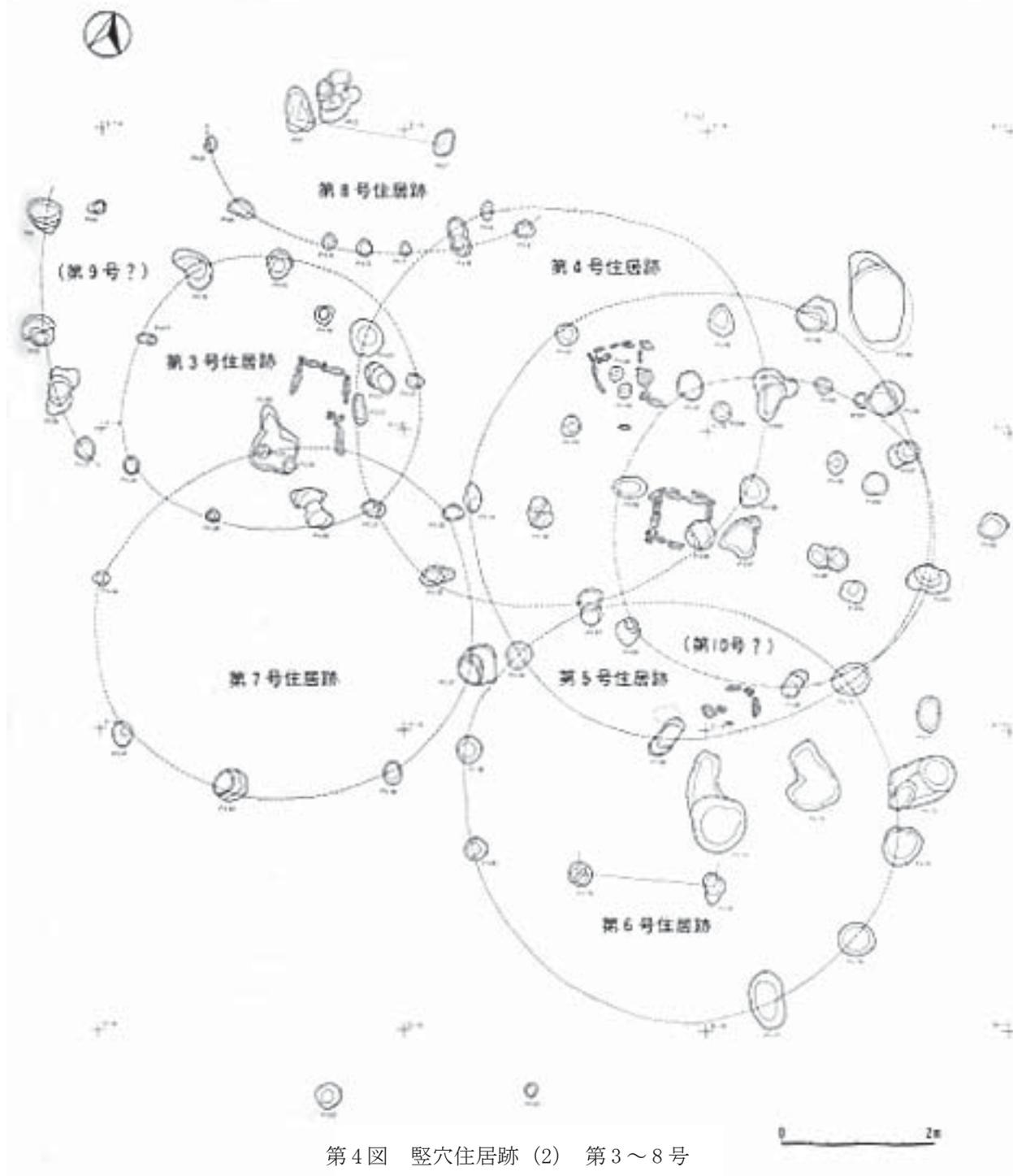
〔位置〕 E-5グリッドを中心とした約150㎡の範囲のなかで検出した。

〔確認状況〕 上記範囲における削平面は多数の小ピット群の輪郭と、4基の石囲炉が露呈していた。それら多数の小ピット群の大半は、精査の結果、竪穴住居跡に伴う柱穴と判断することができ、同様に石囲炉も住居跡の付属施設と判断した。

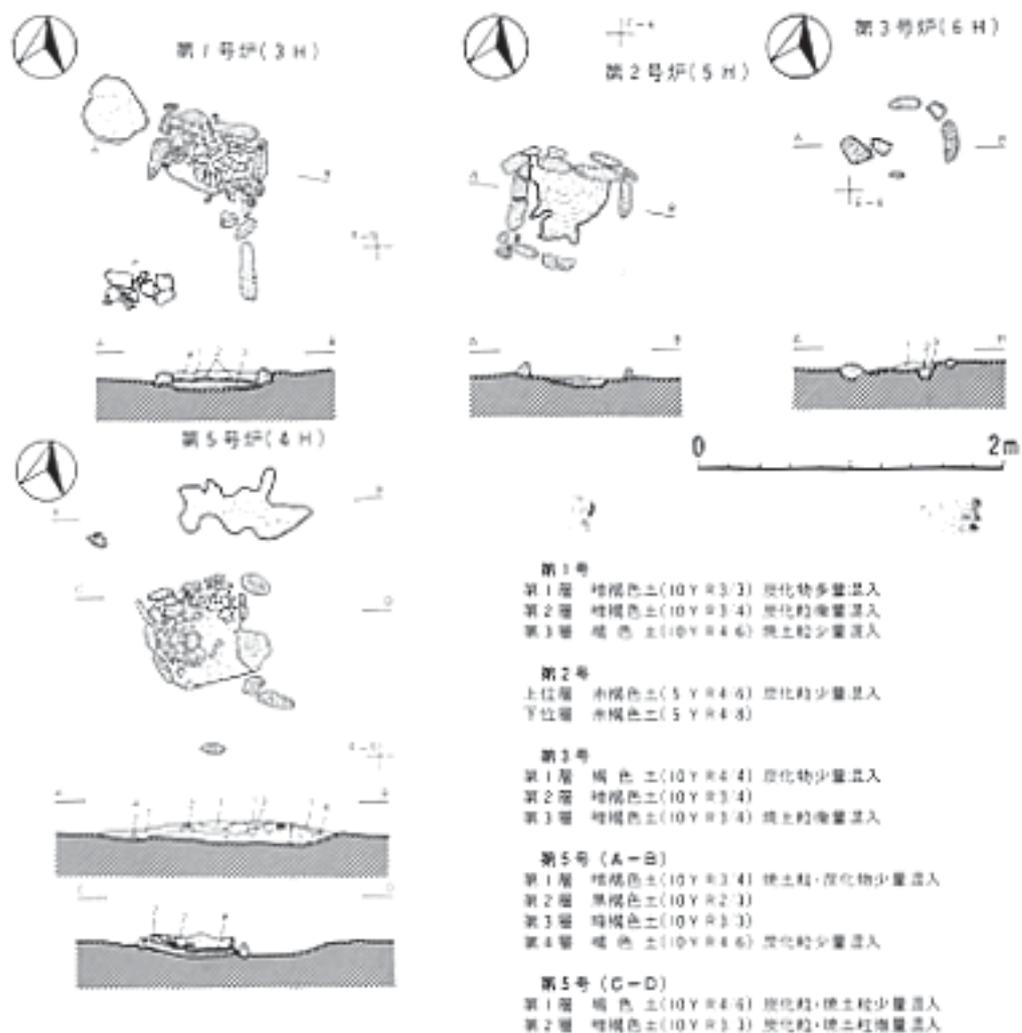
この範囲内に複数の竪穴住居跡が存在していたであろうことは、これら柱穴や炉等から容易に推察できることであったが、すでに屋床面は欠失しているため、竪穴住居跡としての平面プランを推定復原し、その数を知るてがかりは、良好な配置関係を呈し、覆土・規模等にある程度の共通性を有する数多くの柱穴と炉だけであった。このような各視点からの観察を基に分析考察した結果が第4図に掲載した6軒の平面プランである。勿論、第4図に示した6軒の平面プランは、一応根拠に基づいた線引きではあるものの竪穴として視認できず確実性に欠けてい

ピットの深さ (cm)

pit1	48.7	pit11	21.4	pit21	50.2	pit31	74.3	pit41	29.2	pit51	20.2	pit61	36.7	pit71	31.4	pit81	38.0
pit2	74.0	pit12	45.7	pit22	64.7	pit32	22.4	pit42	17.0	pit52	14.3	pit62	24.6	pit72	45.5	pit82	53.0
pit3	22.2	pit13	31.0	pit23	14.5	pit33	42.8	pit43	68.3	pit53	30.8	pit63	34.7	pit73	25.6	pit83	5.2
pit4	45.0	pit14	55.2	pit24	33.9	pit34	41.3	pit44	35.0	pit54	36.0	pit64	39.3	pit74	50.2		
pit5	22.8	pit15	71.5	pit25	34.0	pit35	54.0	pit45	27.2	pit55	23.2	pit65	35.7	pit75	26.6		
pit6	36.0	pit16	33.3	pit26	41.9	pit36	24.5	pit46	17.0	pit56	39.2	pit66	35.1	pit76	22.7		
pit7	42.1	pit17	50.1	pit27	26.7	pit37	64.6	pit47	33.3	pit57	27.4	pit67	23.6	pit77	46.0		
pit8	11.0	pit18	41.7	pit28	71.6	pit38	54.3	pit48	25.5	pit58	28.9	pit68	31.8	pit78	53.6		
pit9	43.6	pit19	27.5	pit29	15.5	pit39	29.9	pit49	68.0	pit59	15.9	pit69	39.1	pit79	46.0		
pit10	56.2	pit20	41.9	pit30	34.1	pit40	42.0	pit50	31.3	pit60	12.5	pit70	32.4	pit80	56.0		



第4図 竪穴住居跡 (2) 第3～8号



第5図 石囲炉 第1～3・5号

るため、間違った復原の可能性も充分考慮しなければならず、また、6軒以外でも復原可能な柱穴配置を呈する竪穴住居跡の存在も多いに考えられる。根拠としては乏しいが柱穴の配置のみで推定するとすれば、図中で細い1点破線で示した如く、6軒以外に2軒の想定が可能である。

〔規模〕 6軒ともに第1・2号と同様柱穴間の計測を参考とすれば、直径が各々、第3号が約3.8m、第4・6号が約5.6m、第5号が約6.0m、第7号が約5.0mのほぼ円形プランを呈するものと推定できる。第3号は、ほぼ第2号と同規模である。なお、第7号は不明であるが、少なくとも直径が5m前後の円形プランを呈するものと推定される。

〔炉〕 上記の約150㎡の範囲内に4基の石囲炉を、さらにそれらの南側でも1基検出し、全調査区域内で5基の石囲炉を検出した。(第5図)

これら5基の石囲炉は、精査の結果、竪穴住居跡に伴う炉と判断したが、竪穴住居跡の把握が推定復原によるものであることから、便宜上、炉に番号を付すことにした。

第1号炉は、第3号竪穴住居跡に伴う炉と推定でき、住居跡の中心からやや東側にずれて位置している。石囲内は、故意に破片としたと思われる土器片を敷きつめ火床面としており、この土器敷設面の下位にも褐色土を1層はさんで堅緻な面の焼土面が存在している。恐らく火床面の改築と考えられる。

石はすべて自然礫であり、敷設された土器は、器面が摩耗し判別困難であるが縄文時代中期後半期土器と考えられる。第2号炉は、第5号竪穴住居跡に伴う炉と推定でき、住居跡のほぼ中央に位置している。石囲内は、数mmの厚さの焼土がみられる。第3号炉は、第6号竪穴住居跡に伴う炉と推定でき、住居跡の中心から大分北側にずれた壁寄りに位置している。本炉の石は、原位置を移動してはいないが重機等の圧力により若干その場で下位におしこまれた可能性が認められ、幾つかの石は他に移動されたと思われる。焼土は断片的に残存していた。第5号炉は、第4号竪穴住居跡に伴う炉と推定でき、住居跡の中心からやや北東側にずれて位置している。本炉も第1号と同様、石囲内には土器片が敷設されており、その下面は約3mmの厚さでロームが焼土化している。土器は第1号同様、摩耗し胴部片だけであるため判別困難であるが縄文時代中期最花式土器と考えられる。炉付近に散在する石は、本炉の石囲の一部と思われる。

なお、第4号炉は3でも後述するが、第1・2・3・5号と同様、竪穴住居跡に伴う石囲炉と推定できるが、その竪穴住居跡は検出できなかった。

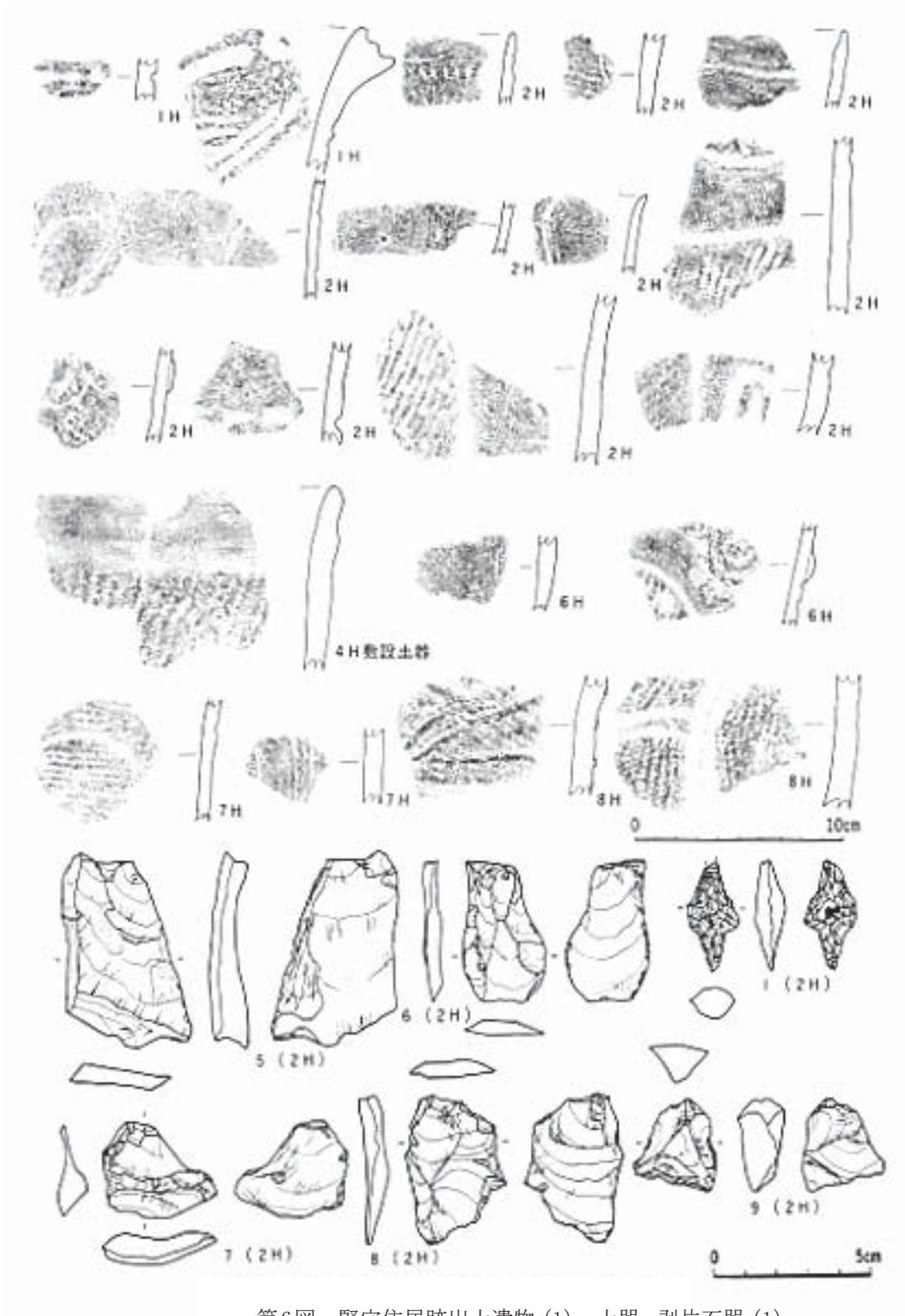
なお、1・5号炉の石囲の外側に隣接して検出された焼土は、どちらも投棄されたと思われる焼土塊であるが、その原位置については不明である。

〔柱穴〕前記、約150□の範囲で約90個の小ピットが確認され、そのうちの大半が図示したとおり、竪穴住居跡の柱穴と判断することができた。柱穴間における新旧については把握することができなかった。全般に探さは、確認面（ローム面）からでも平均50cmと深いつくりである。

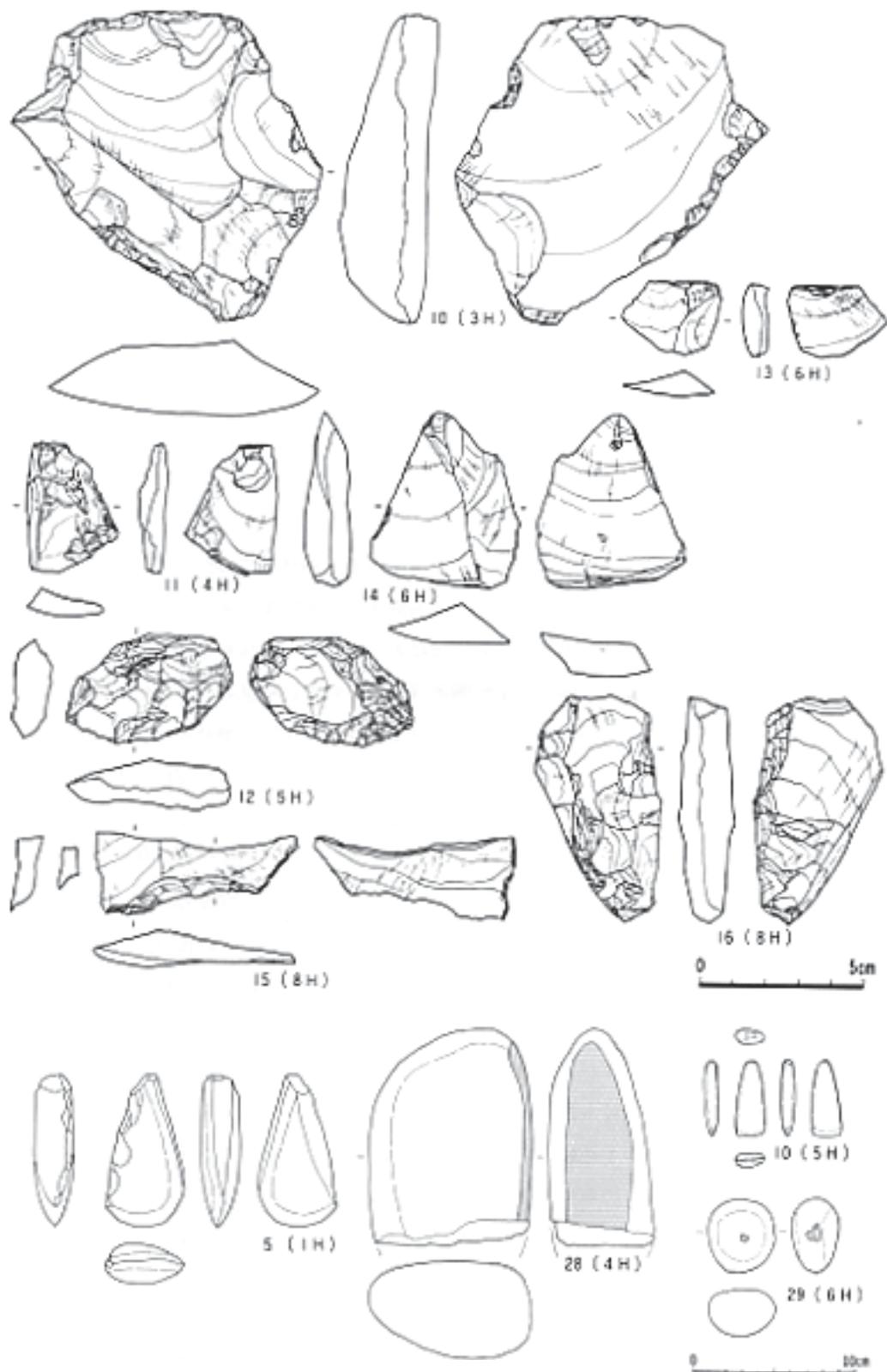
全般に深い割りに底面は、先細状ではなく狭少なながらも平坦面を有するつくりである。第6号竪穴住居の支柱穴と判断したpit79は、底面から根石と考えられる自然礫が1点出土した。なお、根石の例は、この1基のみである。

〔出土遺物〕1・5号炉内から火床面とした敷設土器が出土した。1号の土器は、2個の深鉢の胴下半部を利用し、5号は1個の深鉢の胴部を利用しており、いずれも縄文時代中期末の時期の土器と思われる。2号炉焼土面から小型の磨製石斧が1点出土した。各住居跡の柱穴と考えられる小ピット内からは、土器・石器が出土しているが、時期を決定できる土器はない。ピット内の出土遺物については、表にしてまとめた（第9表）

〔時期〕第3・4号住居跡に伴う土器片敷設石囲炉の土器から両軒とも縄文時代中期末葉（後期？）と推定できる。第5～8号住居跡については、不明である。



第6図 竪穴住居跡出土遺物(1) 土器・剥片石器(1)



第7図 竪穴住居跡出土遺物(2) 剥片石器(2)・礫石器

2. 土 壙 (第8・9図)

土壙は、16基検出した。調査時において土壙として付した番号は、1から25番までであったが精査の結果、25個の番号のうち、遺構と認定できないと判断したものが3個(1・14・24号)精査途中で土壙から別の遺構名に変更したものが7個(4・7～11・25号)あり、それらは欠番として扱った。逆に別の建遺構名から土壙に変更したものは1個(26号)である。

なお、26号については、当初柱穴状小ピットとして精査を進め、途中で土壙とし扱ったため、実測図は、第4図に掲載した平面図のみとなってしまった。

以下、16基の土壙について各観察項目ごとに記述し、計測値等は一覧表としてまとめた。

〔検出位置〕16基ともすべてほぼ平坦な地形を呈する8ラインより西側で検出された。

調査面積が狭少であり断定はできないが、これらの土壙は、D-3グリッドを中一心とした約200㎡の平坦な地域(広場)をほぼ環状にとり囲む配置を呈している。なお、この広場的範囲には、3の項でも後述するが、原位置を多少動いてはいるものの比較的大きな石棒状を呈する形や扁平な自然石が多数散在していた。

〔検出状況〕16基とも基本層序第(企)層最下位から第(協)層上・中位にかけての面で検出された。

このローム面での遺構確認は、重機によるローム面まで削平によるものである。

〔重複〕 竪穴住居跡と土壙(13・23号)の重複においては、いずれも土壙の方が古い。

〔形状〕 全般に不定形のものが多く、定形的と言えるものは、フラスコ状を呈する13・26号と円筒形状を呈する17・19・20号の5基ぐらいだけである。ただし、小ピットが幾つか連結して1個の土壙と取り扱った2・3・12号については、各々の全体形状は不定形と表現はしているものの、個々の小ピットでみるならば、いずれも定形的な円筒形を呈していると言える。

〔規模〕16基の土壙では、類似性を見出すことができない程、規模あるいは形状面において個々ばらばらという印象を受ける。また、遺構の深さについても、構築時の開口部に相当する部位が欠失しているため、余りその数値を重視することができないと言える。

〔覆土〕 6・19号では、断面に柱痕らしい堆積状況を呈する覆土が認められた。なお、6号では、底面に根石と思われる自然石が1個出土している。13号は、上位と下位において極端な堆積状況の相違を見せてはいるが、精査時の所見も加味し、本土壙の覆土は、人為的埋め戻しによるものと思われる。同様に人為的埋め戻しによる覆土と思われる土壙は、26号(図なし)である。3・6・12・19号の4基は、堆積状況からみて柱穴と判断しても差し支えないと思われる。他の土壙については、恐らく自然堆積と思われる。

〔壁・床〕 全般に壁・床面とも粗雑なつくりのものが多い。13・18号の2基だけは比較的壁・床面ともに凹凸が少なく、しまりの強い堅緻な面としてつくられている。

なお、16・21号の2基もこについては、形状・規模の面から竪穴住居跡の可能性も否定はできないものの、壁・床面にしまりがほとんど認められないこと、面に凹凸が目立つこと、さらには

炉・柱穴等が見られないこと等の諸点を考慮し、ここでは一応土壌として扱った遺構である。
 [出土遺物] 出土遺物については、表にまとめたとおりである。遺物がまったく出土しなかった土
 壌は、6・17号の2基だけである。

土器についてみると、土壌からの総出土量は、わずかにダンボール箱で1箱弱であり、かつ、
 その大半が13・16・22号の3基からのもので占められている。従って、他の土壌からの出土量は、
 各々10～20片の程度であり、それらは大半が胴部片かつ、器面の摩滅した破片であった。

各土壌とも土器は、すべて覆土中からの出土である。土器は、円筒上層d式を中心とした縄文
 時代中期後半の時期のものが多く、上層d式以前及び後期のものはみられない。

石器では、剥片石器が2・3・5・12・13・16・23号から、礫石器が3・13・15・16・18・20・22
 号から出土した。特に13号では、11個もの礫石器が覆土中位から底面にかけて出土しており特異
 性が認められる。他には、23号からミニチュア土器が、26号から大珠が出土した。

[時期] 土壌の時期を決定し得る出土状態の土器が皆無に等しいため、断定することはできない
 が、出土土器のほとんどが円筒上層c・d・e式及び榎林式であることから、土壌の構築・使用時
 期は、縄文時代中期後葉から末葉にかけての時期と推定することができる。[用途] 2・3・6・12・
 19・20号の6基は、柱穴と推定できる。ただし、その柱穴がすべて堅穴住居跡の柱穴なのか、ウッ
 ドサークル的建築物の柱跡なのか等については不明である。

13号は、その堆積状況及び遺物の出土状態から、当初の構築目的は別として最終的には墓とし
 て利用されたと思われる。26号も同じく大珠の出土等も考慮し、墓の可能性が高い。

第2表 土壌一覧表

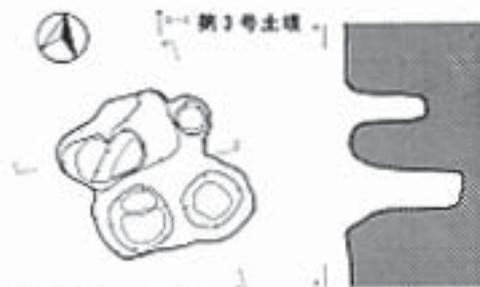
土壌 番号	グリッド	形 状	規 模 (cm)			出 土 遺 物				備 考
			上 面	底 面	深 さ	土 器	剥片石器	礫石器	土石製品	
2号	B・C-11・0	1區の連結した円筒状	各40～50	各10	45	微量 (中期末)	不定形破片			柱穴(竹)
3号	〃	楕 円	各25～50	各20～30	65～90		〃 破片	5点		〃 (竹)
5号	B-0	不定形	—	—	45	少量 (中 期)	剥片石器			
6号	B-(-)1	不整ナリ鉢状	10×60	25	35					柱穴
12号	C-1	樽状・環状	各50	各20	80	破片4片	不定形破片			〃
13号	F・G-1	フラスコ状	115×125	200	120	中量 (大塚集)	不定形破片	11点		墓 (竹)
15号	A・B-1	不整皿状	130×130	130×160	25	微量		1点		
16号	A-0・1	不整整穴状	270	240	60	中量 (大塚集)	剥片石器	1点		
17号	B-5・6	不整円筒状	50×90	35×55	50					
18号	B-6	不整箱状	90×110	70×85	65	少量 (中期末)		2点		
19号	A-6	円筒状	150×750	65～	70	少量 (上層d)				柱穴(竹)
20号	〃	〃	60×70	50×45	35	少量 (上層d)		1点		柱穴(竹)
21号	A-6・7	不整整穴状	—	(170)	60	少量 (上層d)				
22号	A・B-7	不定形	—	30×70	25	中量 (上層d)		1点		
23号	E・F-5・6	不整方形皿状	120×145	105×100	30	少量 (中期末)	不定形破片		2・F・7点	
26号	F-6	部分的フラスコ状	70×130	40×110	62				大珠 1点	墓 (竹)



第2号土坑



- 第1層 暗褐色土(10Y R3/3) 炭化粒・焼土粒多量混入
- 第2層 暗褐色土(10Y R3/4) 炭化粒多量
- 第3層 褐色土(10Y R4/4) 炭化粒多量
- 第4層 暗褐色土(10Y R3/3)
- 第5層 褐色土(10Y R4/4)
- 第6層 褐色土(10Y R4/5)
- 第7層 黄褐色土(10Y R5/5)



第3号土坑



- 第1層 暗褐色土(10Y R3/4)
- 第2層 暗褐色土(10Y R3/4)
- 第3層 褐色土(10Y R4/4)
- 第4層 褐色土(10Y R4/4)
- 第5層 褐色土(10Y R4/4)
- 第6層 暗褐色土(10Y R3/4)



第5号土坑



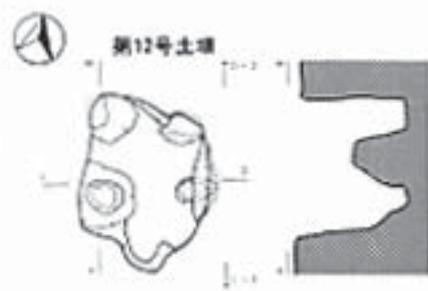
- 第1層 暗褐色土(10Y R3/4) 炭化粒多量・焼土ブロック混入
- 第2層 褐色土(10Y R4/4)
- 第3層 褐色土(10Y R4/4)
- 第4層 褐色土(10Y R4/6)
- 第5層 黄褐色土(10Y R5/6)
- 第6層 暗褐色土(10Y R3/4)
- 第7層 黄褐色土(10Y R5/5)



第6号土坑



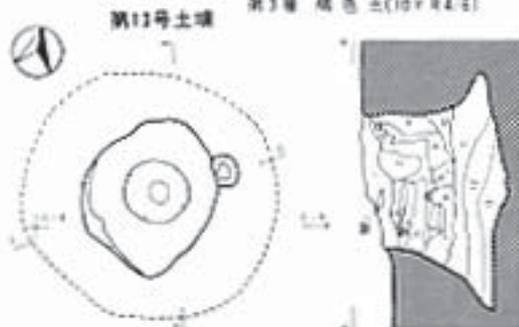
- 第1層 暗褐色土(10Y R3/4)
- 第2層 褐色土(10Y R4/4)
- 第3層 褐色土(10Y R4/5)



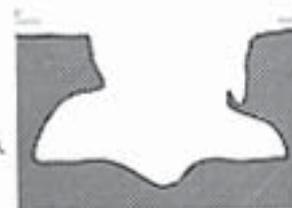
第12号土坑



- 第1層 黄褐色土 焼土粒多量
炭化粒多量混入
- 第2層 暗褐色土
- 第3層 暗褐色土
- 第4層 褐色土
- 第5層 褐色土
- 第6層 黄褐色土



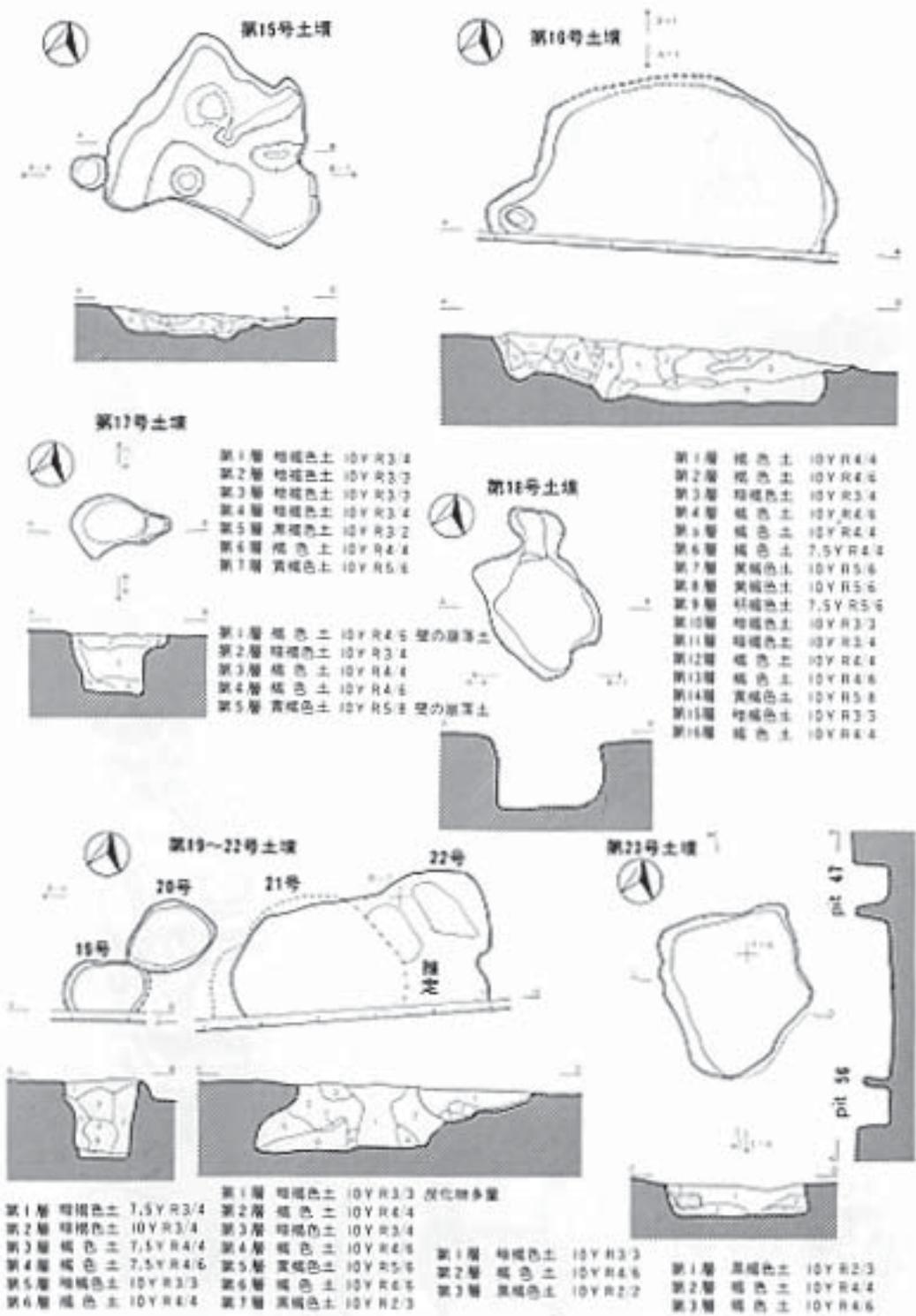
第13号土坑



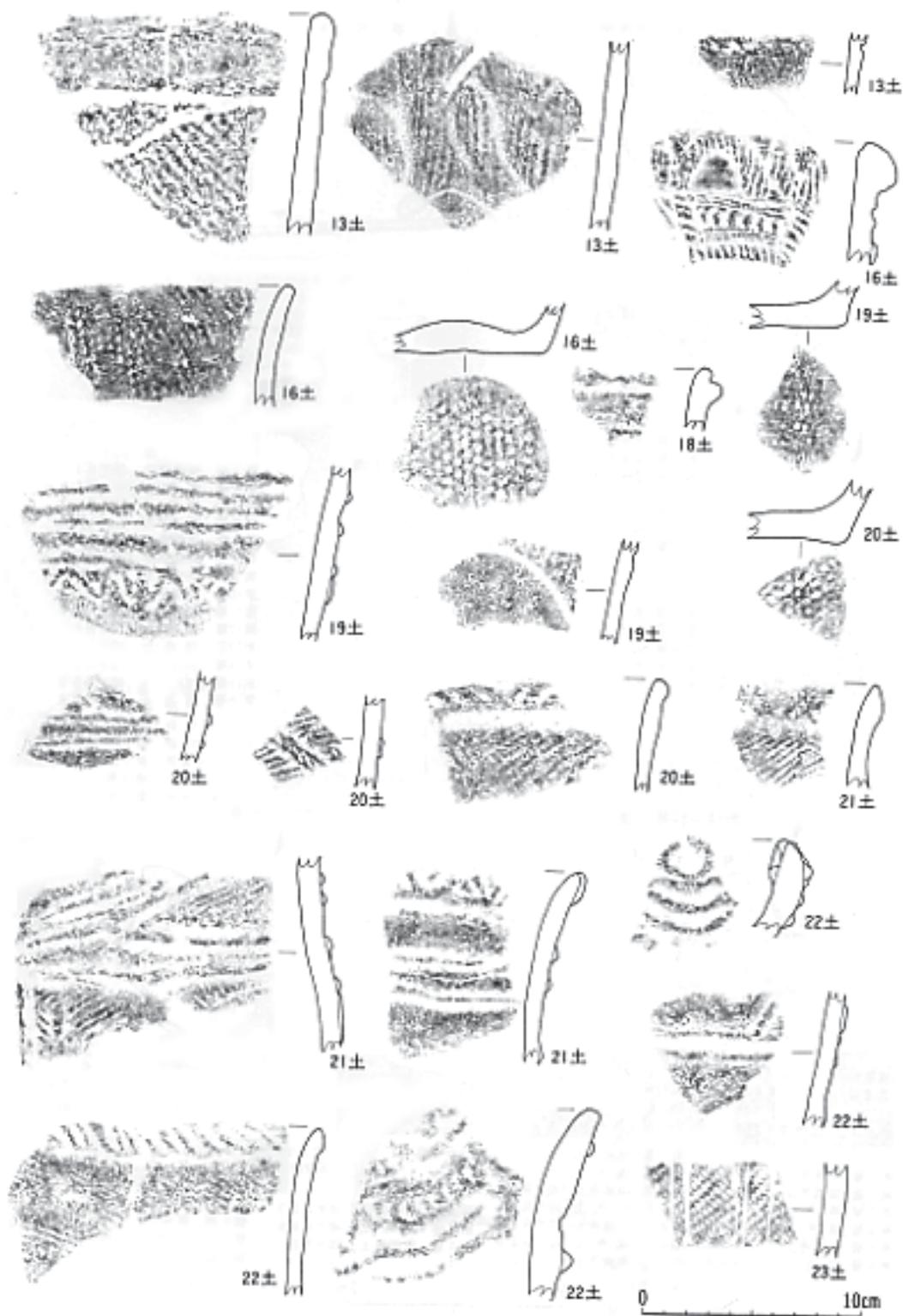
- 第1層 暗褐色土(10Y R3/4) 炭化物多量混入
- 第2層 暗褐色土(10Y R3/2) 炭化物多量混入
- 第3層 褐色土(10Y R4/4)
- 第4層 褐色土(10Y R4/4)
- 第5層 褐色土(10Y R4/6)
- 第6層 褐色土(10Y R4/4)
- 第7層 褐色土(10Y R4/6)
- 第8層 黄褐色土(10Y R5/6) 浮石多量混入
- 第9層 褐色土(10Y R4/5)
- 第10層 黄褐色土(10Y R5/6) 炭化粒・焼土粒多量混入
- 第11層 黄褐色土(10Y R5/8)
- 第12層 红黄褐色土(10Y R6/6)
- 第13層 褐色土(10Y R4/6)
- 第1層 红土・黄褐色土(10Y R5/4)
- 第2層 黄褐色土(10Y R5/5)

0 2m

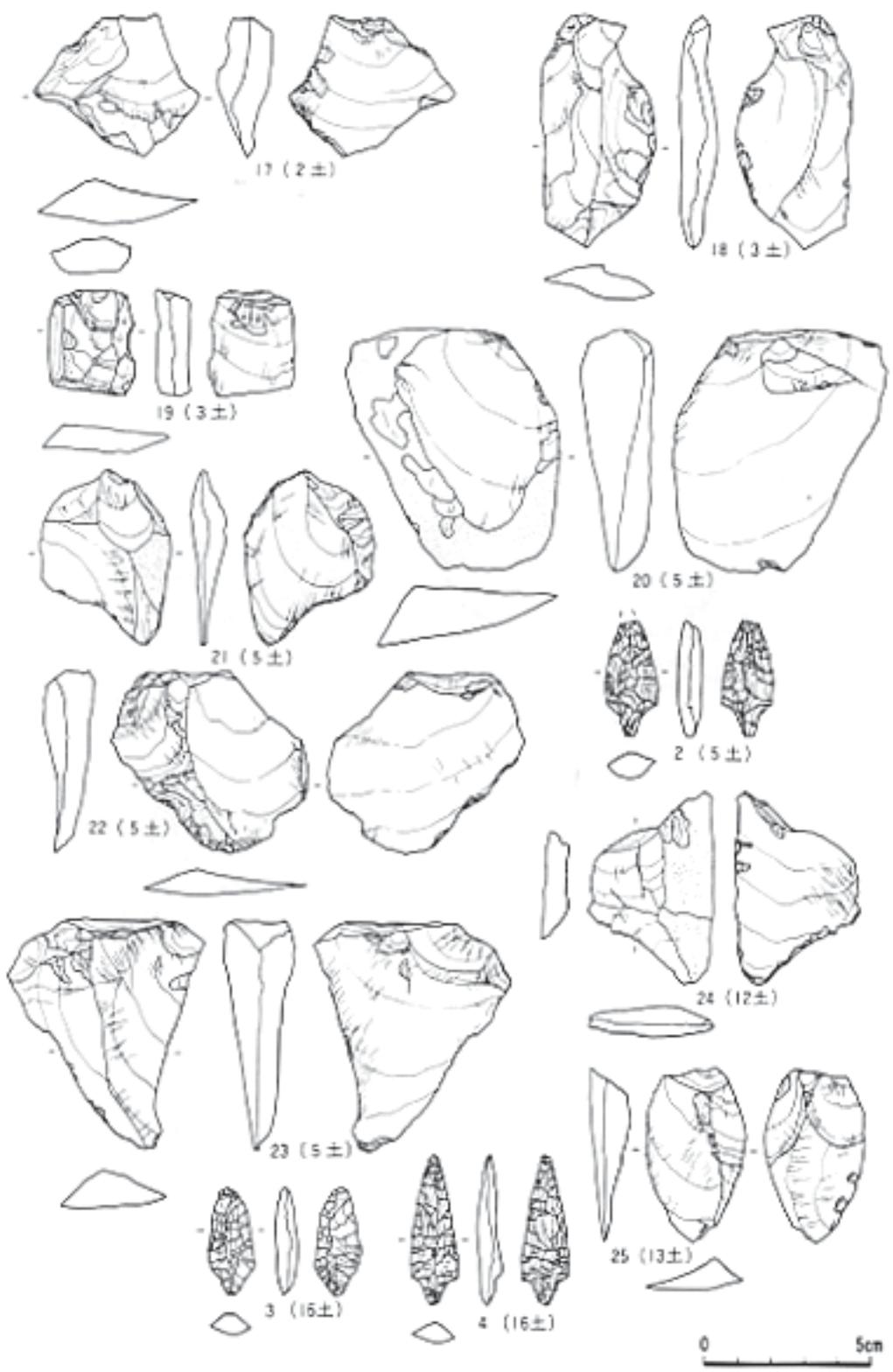
第8回 土坑(1) 第2~13号



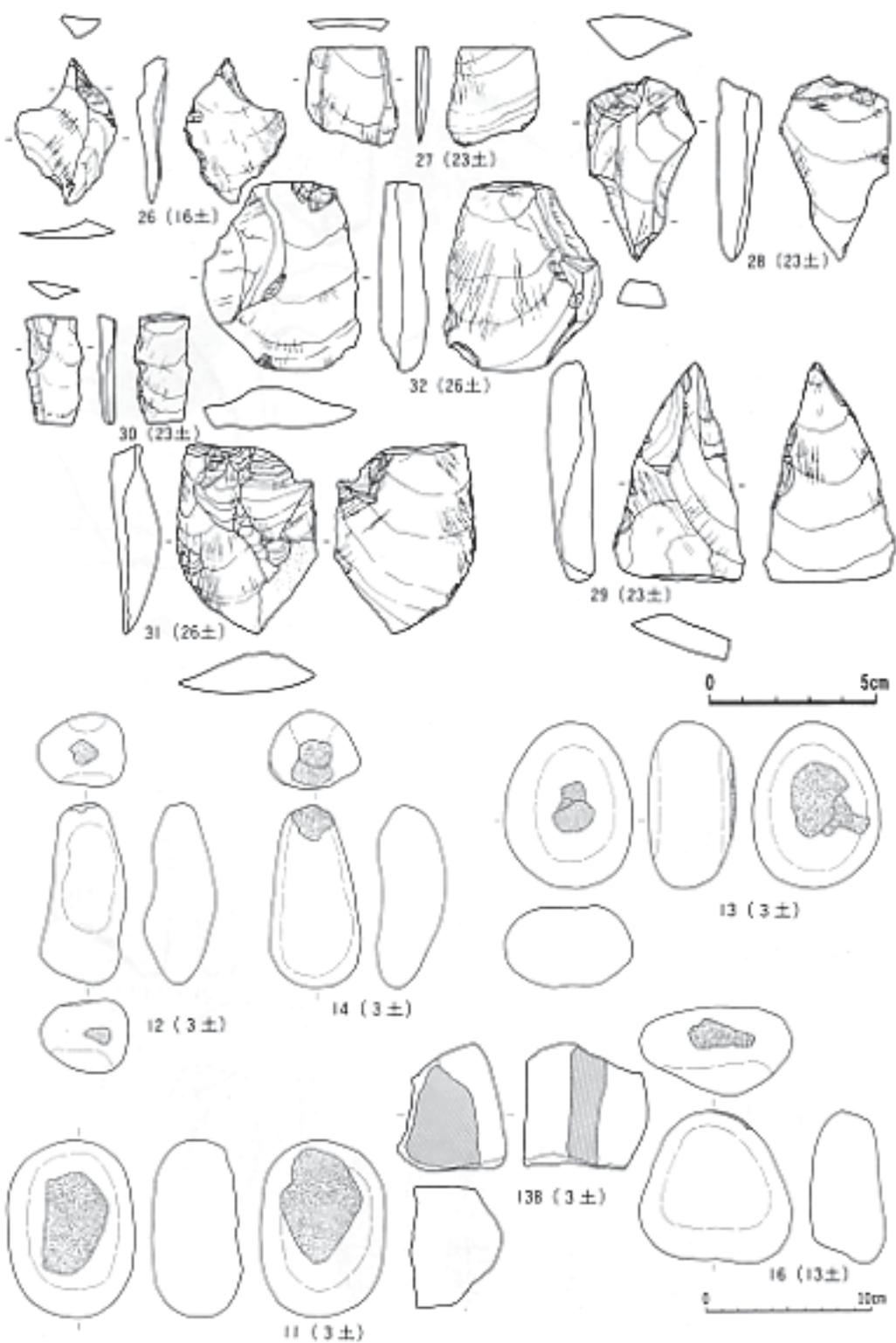
第9图 土壤(2) 第15~23号



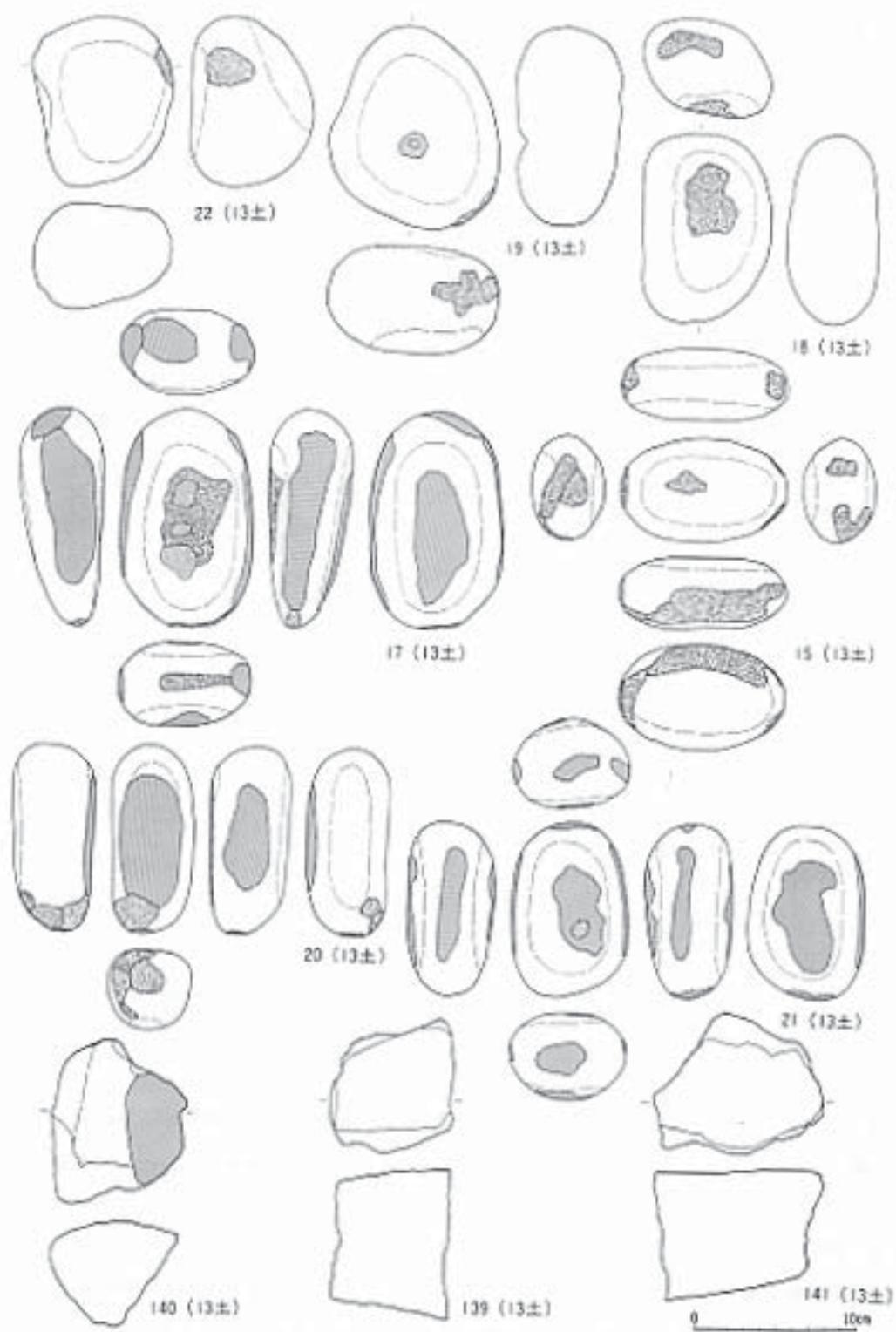
第10图 土壤出土遺物(1) 土器



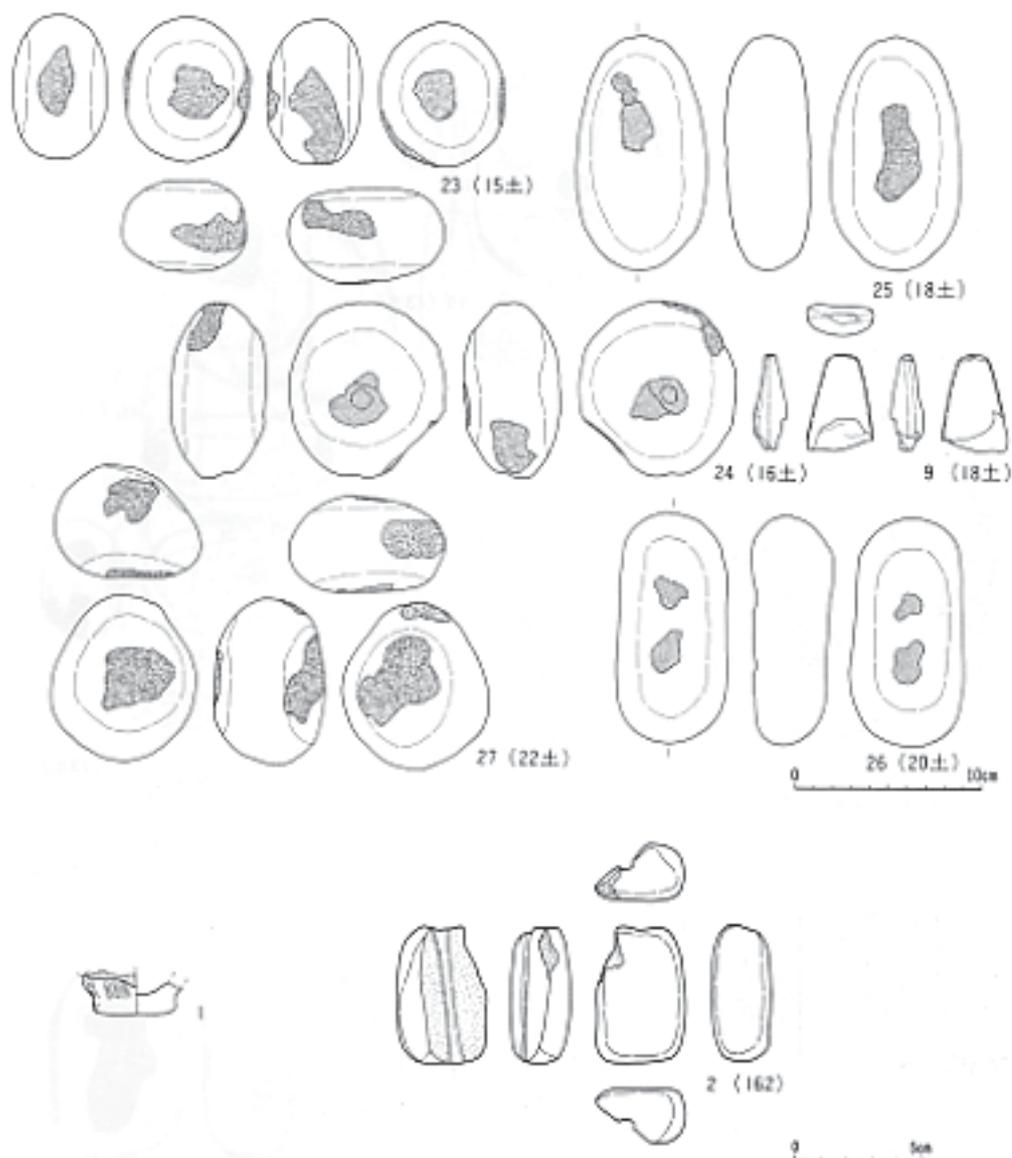
第11图 土壤出土遺物(2) 制片石器(1)



第12圖 土壤出土遺物(3) 剝片石器(2)・礪石器(1)



第13回 土境出土遺物(4) 礫石器(2)



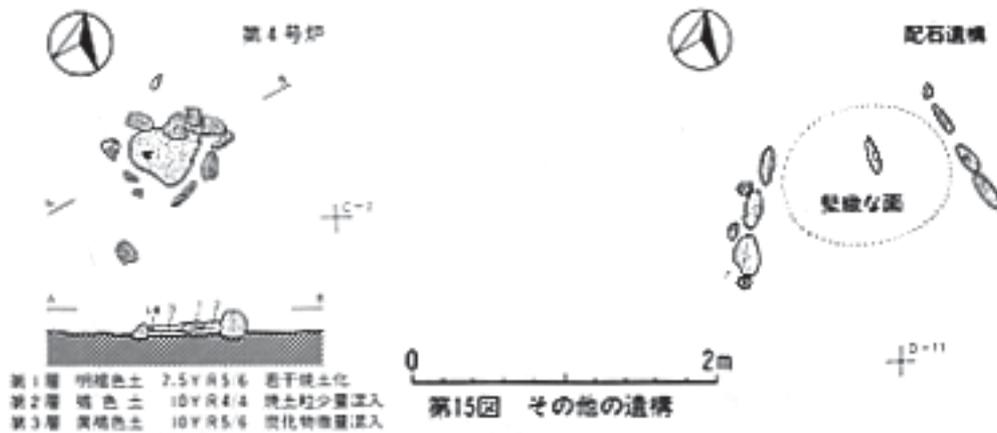
第14図 土壇出土遺物(5) 礫石器(3) 土・石製品

3. その他の遺構 (第15図)

竪穴住居跡、土壇以外に検出した遺構は、炉1基、配石遺構1基及び竪穴住居跡の項で記述した竪穴住居跡の柱穴と推定した以外の多くの柱穴状小ピット等である。

(1) 炉 (第4号炉)

本章第1節でも竪穴住居跡の項で簡単に記述してはいるが、C-6グリッドで検出し第4号炉と呼称した石囲炉である。石は、若干重機の削平により原位置からずれてはいるが当時の形状を推定するには充分である。石囲内には数mm程度の軟質な焼土がみられる。この焼土が軟質



であることは、調査着手前より、この付近が削平により多少凹地となっており、常に湿気が多く、時には冠水状態であったことに起因していると思われる。本炉は、規模及びつくり等から推定し、竪穴住居跡内の炉と考えられるが、その住居跡を検出することはできなかった。

炉の時期は、それを決定し得る共伴する土器が出土しなかったので不明である。

(2) 配石遺構

D-10・11グリッドにおいて、ほぼ原形を保ったままの状態の特異な配石を呈する遺構を1基検出した。石は総計11個使われ、全体の形は、「ハ」字状を呈し両側の中央ややすぼまる側の位置に1個の石が配されている。すべて、扁平かつ細長い自然礫を使用している。石は、ローム面を若干掘りくぼめ石底面を各々固定している。石は、すべて焼けた痕跡は認められない。

直線的な2列の石に囲まれた中は、厚さ数mmの薄いローム質の土をほぼ円形に敷き上面を踏み固めた平坦面が作り出されている。配石内から焼土あるいは骨片及び遺物は出土しなかった。

本遺構の時期及び性格については現在のところ不明である。

(3) 柱穴状小ピット

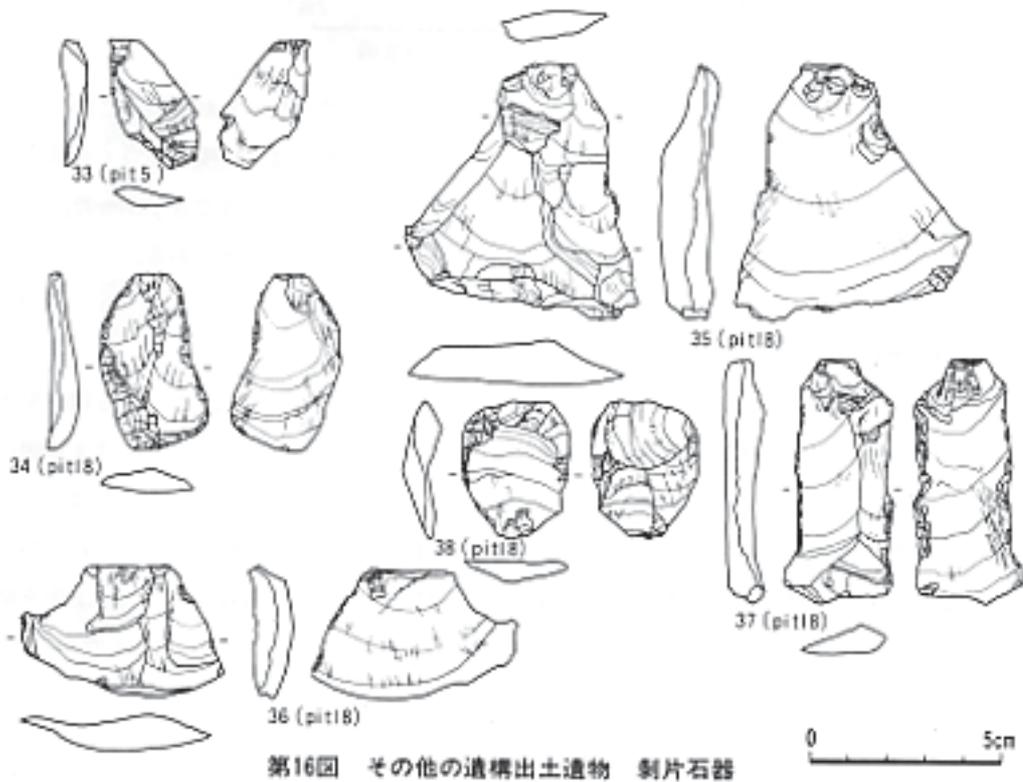
竪穴住居跡の項でも記述したとおり、E-5グリッドを中心とした約150㎡の範囲で多数の柱穴状小ピットを検出した。その数は約90基であり、それらの大半は、第4図に図示したとおり約6～8軒分の竪穴住居跡の柱穴と判断したが、残りの小ピットについては、その大半が同様に竪穴住居跡の柱穴の可能性が高いと推定できるものの現時点においては、配置関係・覆土・規模等から柱穴と断定するまでには至っていない。なお、ピット番号49は欠番である。

1の項で扱った住居跡の柱穴と推定したものも含め、小ピットからは、若干数であるが、各々の覆土内から土器・石器が出土しており、総小ピットのうち遺物が出土したものだけを取り上げ一覧とした。土器は、いずれも細片かつ各々微量であり時期を決定することは困難であるが概ね縄文時代中期後半の時期のものと思われる。

(4) その他

調査区域西側のやや平坦な範囲には、ローム面に多数の自然石が散在していた。石は、大半が棒状や偏平な形のもので石囲炉に使用した石と同じ程度の大きさのものばかりである。それらのほとんどは、原位置から移動したと判断できるものばかりであり、石の配置を推定することはできなかったが、量の多さ、石の規格性、(2)の遺構の存在等から、調査区域内あるいは本遺跡内には幾つかの、または大規模な配石遺構が存在していた(いる)と推察できる。

(遠藤 正夫)



第16図 その他の遺構出土遺物 製片石器

第2節 出土遺物

1. 土器

本遺跡において出土した遺物の総量は、ダンボール箱で約47箱であるが、そのうち土器は約7割を占めている。しかし、調査前の重機による削平によってローム面まで露呈しており、遺物が相当数、破壊及び移動していたため、土器の取り上げはグリッド一括及び表面採集がほとんどであった。さらに、原因不明であるが、土器表面の摩滅が激しいこと等から復原率は非常に低く、1割にも満たないものであった。

本遺跡の出土した土器を土器型式別に分けると、層位ごとの遺物取り上げが不可能であった

ため、層位と土器型式の関係を把握することはできないが、円筒下層 d₂ 式から円筒上層 b 式、c 式、d 式、e 式、榎林式、最花・中の平Ⅲ式、十腰内Ⅰ式等が出土しており、出土土器の主体を占めるのは、円筒上層 c、d 式及び榎林式の土器群である。

以下、土器の分類基準を次のように定め、記述していく。

第Ⅰ群土器…円筒下層式に比定できるもの

第Ⅱ群土器…円筒上層式に比定できるもの

第Ⅲ群土器…榎林式に比定できるもの

第Ⅳ群土器…最花・中の平Ⅲ式に比定できるもの

第Ⅴ群土器…十腰内Ⅰ式に比定できるもの

第Ⅵ群土器…土器型式を特定し難いもの

第 群土器 (第 21 図 29)

本群土器は、円筒下層式に比定できる土器であり、口縁部1片のみの出土である。土器型式は、円筒下層 d₂ 式である。器形は頭部から口縁に向かい大きく外反する形状になると思われる。口縁は小波状口縁を呈しており、頂点より垂下する粘土紐貼り付けによる隆帯を有している。口縁部文様は押圧縄文による幾何学文様が施文されている。胎土には植物性繊維の混入はみられない。

第 群土器

本群土器は、円筒上層式に比定できる土器であり、型式の違いにより 1～4 類に分け、記述していく。

1 類 (第 18 図 10・11 第 19 図 12)

本類土器は、円筒上層 b 式に比定できる土器である。出土量は少ない。分類基準は、b 式のメルクマークである口縁部文様帯間の捺糸による爪形圧痕文の存在、隆帯に沿った数条の押圧縄文、文様帯の幅が器高の約 3 分の 1 を越えないものである。器形は深鉢形を呈し、口縁部は弁状突起を有する口縁と平縁があり、比較的厚手で、外反している。胴部文様は多段で横位の羽状縄文がほとんどである。

2 類 (第 17 図 1・2 第 19 図 14～19 第 20 図 20)

本類土器は、円筒上層 c 式に比定できる土器である。出土した土器の中の主体を占めるものの一つである。分類基準は、c 式のメルクマークである口縁部文様帯間の刺突文と口縁部文様帯が器高の 3 分の 1 以上を占めるものである。器形は深鉢形を呈しており、b 式の土器と比べ、比較的小型化している。外反する弁状突起を有する口縁と平縁のものがあるが、隆帯は細くなり、ボタン状貼り付け装飾や橋状把手が現れてくる。本遺跡では、この時期から突起に貫通す

る小孔を有するものや、突起裏面にくぼみ等の装飾を付すようになる。胴部文様は多段で横位の羽状縄文が主体を占めている。1の口縁部は山形突起であり、頂部より垂下する「ノ」字形の隆帯及び隆帯に沿った押圧縄文は円筒上層a式の特徴を有し、口縁部隆帯間文様は、竹管等による刺突文が施されている土器である。15はb式のメルクマークである撚糸による爪形圧痕文と、隆帯に沿った2～3条の押圧縄文を有しながらも、文様帝の構成がc式に近いものである。F-9グリッドを中心にまとまった形で多量に出土している。また、16は前述の土器と共伴して出土し、それらの土器特有の二又の突起を有しているが、押圧縄文が消え、撚糸による爪形圧痕文から刺突文に変化しており、さらに17は同じモチーフを有しながら、刺突文であり、小型化されている。このことから、本遺跡において13～17の土器はc式初頭と捉えた。

3類

本類土器は、円筒上層d式に比定できる土器である。本遺跡では最も出土量が多い。d式の土器と地文縄文のみを主体とする土器に分けて記述する。

d式に比定できるもの（第17図3 第20図21～23 第21図30）

分類基準は、地文縄文を全面に施した上に細い粘土紐（隆線）を貼り付け、幅広い口縁部文様帯を構成しているものである。器形は深鉢形を呈してしるが、b式、c式に比べ、胴部張り出しが弱い。器高は大形のものも小形のものもあり、一定ではない。口縁部は弁状突起を有する口縁と平縁のものがあり、突起の形状は、b式、c式に比べ、若干の小形化・薄手化がみられ、大きく外反するものは少ない。突起裏面には、くぼみや粘土紐貼り付けによる装飾がなされているのがほとんどである。口縁部文様帯は胴部中央まで下がっており、突起から垂下する隆線に横位の隆線を連結する胸骨文が多いが、方形に区画され、その接点にボタン状の粘土紐を貼り付けたもの(23)等がみられる。口唇部文様は、隆線を波状に貼り付けているものがほとんどであるが、隆線の代わりに鋸歯状に押圧縄文を施されたもの(30)がある。地文は半々の割合で羽状縄文と斜行縄文のものがみられる。

地文縄文のみを主体とする土器（第17図4 第21図34）

分類基準、口縁部文様帯を構成する隆線はなく、地文縄文のみを主体とするものである。器形はd式のモチーフに近く、小形である。口縁部は、山形突起が主体となる波状口縁と平縁のものがあり、突起のみに粘土紐を貼り付けている。また、突起下にボタン状の把手を貼り付けているものもあり、突起裏面にはくぼみがみられる。地文は斜行縄文が主体を占め、羽状縄文は少なくなる。

4類（第20図24 第21図31～33）

本類土器は、円筒上層e式に比定できる土器である。出土量は少ない。分類基準は、沈線による胸骨文等を主体とする文様である。器形は深鉢形を呈し、小形の山形突手を有し、突起には粘土紐による装飾が施されている。胴部文様は、胸骨文にみられる孤状の沈線よりも直線的

な沈線による文様が構成されているものが多い。口唇部上面に、撚糸による圧痕の上にd式の波状の隆線が形骸化したと思われる「S」字状の粘土紐の貼り付けによる装飾が施されているもの(31)がある。地文は斜行縄文が主体を占める。

第Ⅲ群土器 (第17図5 第18図6・7 第20図25～27 第21図35～37)

本群土器は、榎林式に比定できる土器である。出土量が多い。器形は深鉢形を呈しており、大形のものが多い。口縁部は4個の突起を有する波状口縁が主体であるが、6個のものもある。口唇部は大きく膨隆し、突起には渦巻文が施され、口縁に沿って走る太形沈線に連結しているのが主体であるが、沈線の周囲に刺突文を有するもの、渦巻文ではなく、円形のくぼみや小孔になっているもの等がある。地文は斜行縄文が、胴部文様は沈線による円や渦巻文が多いが、直線的なもの、地文のみのもの、円筒上層式の名残とも思える隆線による文様(25)等がある。

第Ⅳ群土器 (第20図28 第21図38～42)

本群土器は、最花・中の平Ⅲ式に比定できる土器である。出土量は少ない。器形は深鉢形を呈しており、口頸部は内反するものとしがないものがあり、口縁は平縁である。土器表面に煤が付着しているものが多い。口縁部文様帯と胴部文様帯は、棒状工具、竹管等の刺突で区画されている。口縁部文様帯は無文のものが多く、地文は斜行縄文が主体であるが、口縁から斜行縄文が施されるもの(39)、口唇部から垂下する一条の隆線があり、その隆線に沿って竹管等による刺突がみられるもの(40)もある。胴部文様帯は、沈線による先端が弧状を呈した懸垂文、2条の沈線で長楕円を描いているもの(41)、先端が渦巻状を呈する懸垂文が施され、その頂部の口縁部に小さな突起を有しているもの(42)等がみられる。

第Ⅴ群土器 (第21図43・44)

本群土器は、十腰内Ⅰ式に比定できる土器である。出土量は極めて少なく、土器片10点にも満たないものである。全体の形状を把握できるものは少ないが、器形は深鉢形を呈すると思われる。ただし、43は鉢形を呈する。施文文様は沈線や網目状撚糸文がみられる。

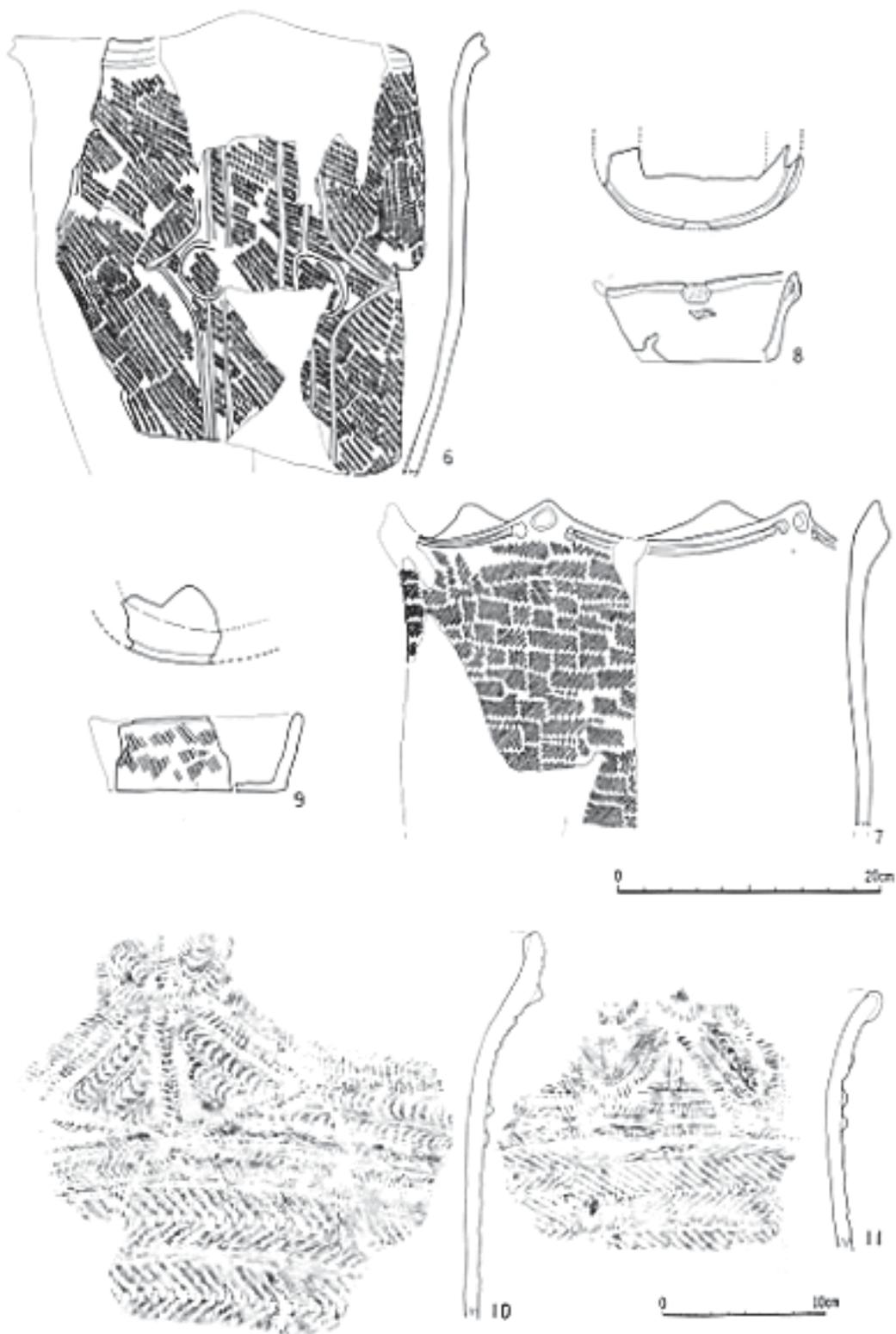
第Ⅵ群土器 (第21図45～51)

本群土器は、土器形式を特定し難い土器である。口縁部が残存しているものだけを記述する。45は器形が最花・中の平Ⅲ式に類似するものの、口縁部文様帯が斜位の棒状工具等による刺突が全面に施されている。46は器形がキャリパー状を呈し、波状口縁を有するものと推測されるが、突起頂部より「ノ」字形に垂下する降帯が口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する隆帯に連結しており、口縁部文様帯は無文である。円筒上層式の名残を思わせる土器である。47は器形が深鉢形を呈すると思われ、沈線の文様から大木10式併行土器と推測される。48及び49は押圧縄文と櫛歯状沈線から後期初頭と思われる。50は口縁部上部が欠損しており、形状を把握することはできないが、斜め上に突出した突起があり、その両側に口縁部と胴部を区画する横位の

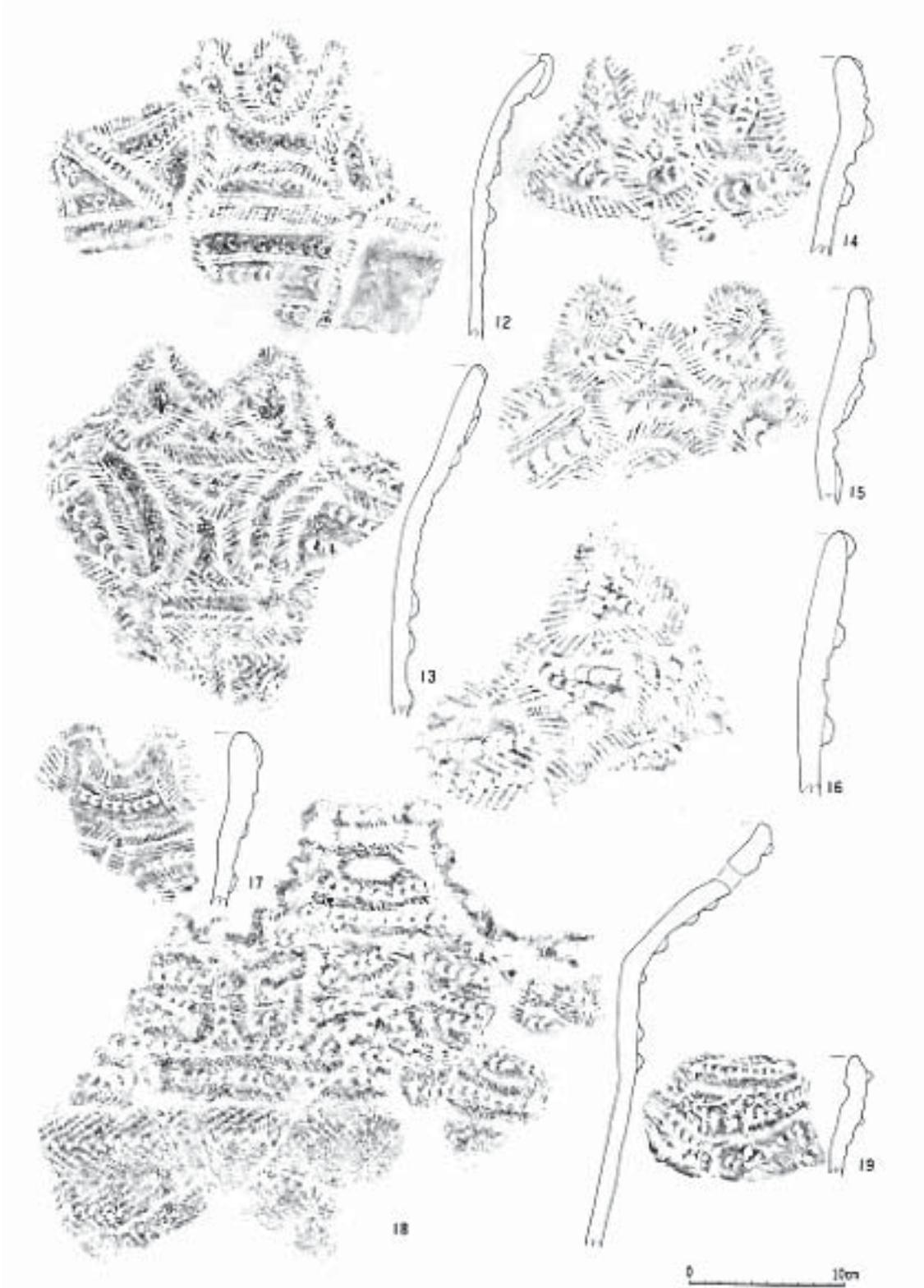
刺突が施されている。時期は榎林式から最花・中の平Ⅲ式に移行する頃ではないだろうか。51は器形が深鉢形を呈し、口縁は波状口縁であり、最花・中の平Ⅲ式の器形に類似しているが、地文縄文を付した上に、沈線や隆沈線ではなく細い粘土紐を貼り付け、その周囲の縄文をすり消したものである。時期は大木 8b 式併行期と思われる。 (上野 隆博)



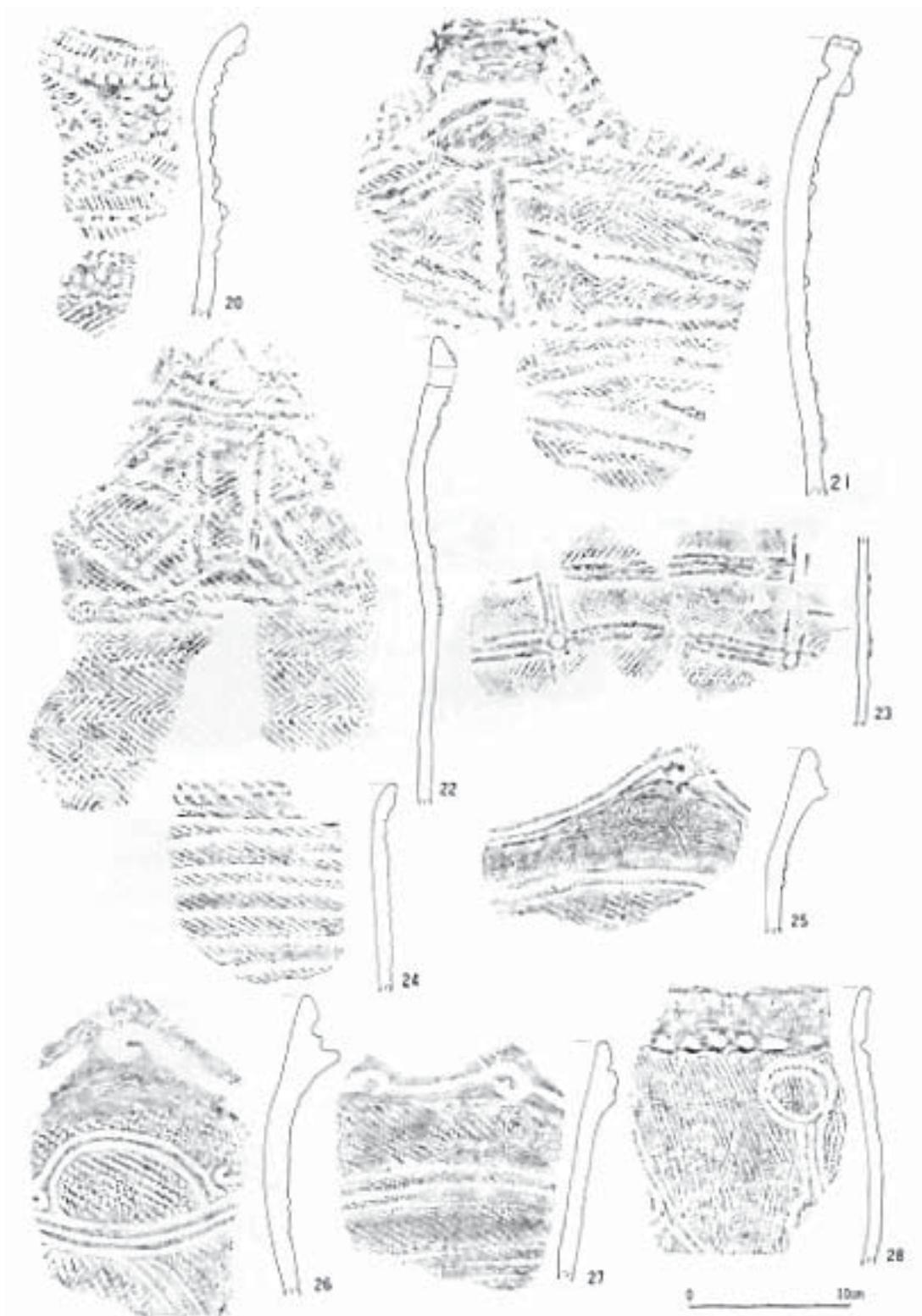
第17図 遺構外出土遺物(1) 土器(1)



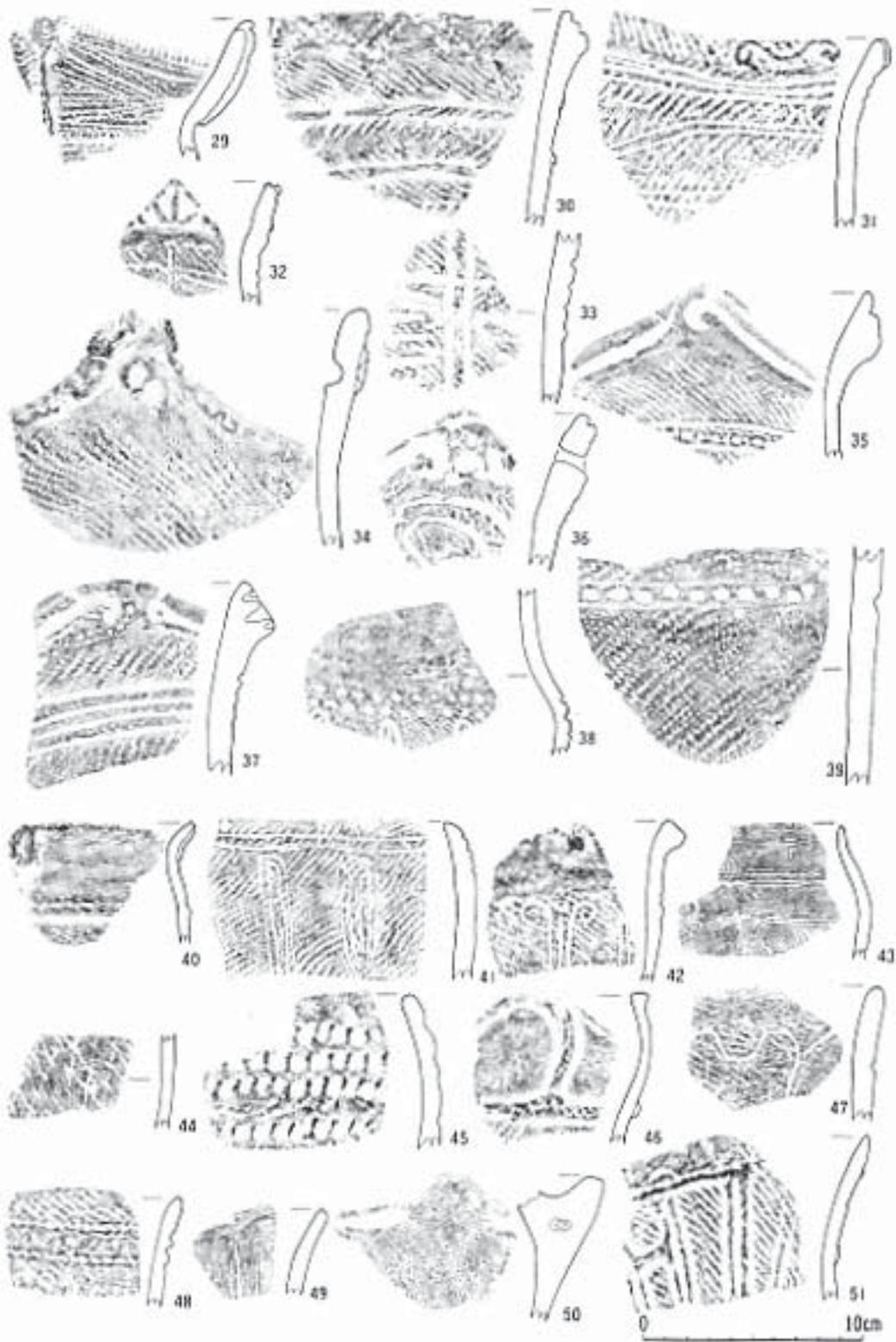
第18圖 遺構外出土遺物(2) 土器(2)



第19圖 遺構外出土遺物(3) 土器(3)



第20回 遺構外出土遺物(4) 土器(4)



第21回 遺構外出土遺物(5) 土器(5)

2. 石器

石 鏟

15点出土した。遺構内では第2号竪穴住居跡ピット4から1点、第5号土壇から1点、第16号土壇から2点の出土で、いずれも覆土からである。遺構外では11点の出土である。完形品4点、欠損品11点（鏟先が欠損のもの7点、基部が欠損のもの4点）。これらは無茎鉄と有茎鉄に細分した。

類 無茎鏟 1点（第22図39）

形態は二等辺三角形に近く、縁辺加工で、やや粗雑な整形である。表裏面とも主要剥離を残すものである。石質は、珪質頁岩である。

類 有茎鏟 14点

基部の形により、T基とY基に細分した。

a T基のもの 3点（第22図40・41・42）

表裏面とも調整が施されている。40は鏟先が欠損し、41は基部先端部と鏟先が欠損し、表裏面の基部にアスファルトが付着している。41と42は形態が五角形に近い。石質は、すべて珪質頁岩である。

b Y基のもの 11点（第22図43～49 第6図1第11図2・3・4）

形態が三角形に近いものが6点である。側縁部がやや直線的なものが多く、表裏面に細部調整が施されている。45は縁辺が細部調整されている。その他は、基部先端部と鏟先が欠損しているのが多い。その他の5点は、形態が菱形と木葉形に近く、基部は、関部から茎部へと直線なものが多いが、やや外湾しているものもある。表裏面に調整が施されているが、粗雑である。1は、裏面の中央部にアスファルトが付着している。石質は、すべて珪質頁岩である。

石 槍

4点出土した。薄手のものと厚手のものがあるが、幅広のものは薄手、細身のものは厚手の傾向がある。定形品1点、欠損品3点（先端部が欠損のもの）。

a 挟りのあるもの 1点（第22図50）

幅広、薄手で、全体に細部調整が施されている。先端部が欠損している。石質は黒曜石である。

b 挟りのないもの 3点（第22図51・52・53）

51と53は細身、厚手であり、51の基部の断面形状は五角形に近い。52は形態が木葉形を呈し、断面形状は三角形に近い。石質は、すべて珪質頁岩である。

石 錐

1点のみ出土した。素材は、縦長剥片で、打面の反対側に機能面がある。錐部は欠損している。機能面の断面形状は三角形である。石質は珪質頁岩である。(第22図54)

石 匙

1点のみ出土した。縦型石匙で、先端部がしだいに幅狭となり、尖頭状を呈し、片面調整されている。素材は、縦長剥片で、柄部が中央に位置し、打面方向に作出されている。石質は珪質頁岩である。(第23図55)

石 篋

4点出土した。完形品1点、欠損品3点。57は、基部が細く、形態が三角形を呈し、表裏面に整形が施されている。刃部は直刃気味である。56は形態が台形状を呈し、基部が欠損している。刃部は弧状気味である。58は基部の一部を欠いているが、ほぼ完形に近いものであろう。剥離痕が大きく、片面調整が施されている。刃部は弧状気味である。59は刃部に比べ、基部の幅がやや狭くなっている。両面とも調整が施されている。刃部は弧状気味である。56、57、59は刃部作出の剥離の両面加工である。石質は、すべて珪質頁岩である。(第23図56・57・58・59)

不定形石器

竪穴住居跡ピットから12点、土壇から16点、小ピットから6点、遺構外からは38点の、総数72点が出土した。形状や調整の度合などから以下の三つに細分した。

a 定形的な刃部を持つ石器で、いわゆるスクレイパーの類

(第6図5 第7図10・12・16 第11図18 第23図60～62 第24図63～70 第25図71～77)

24点出土した。62は石篋に似た石器で、薄い剥片を素材とし、表面は、縁辺部が細部調整が施されている。刃部は直刃で、両面加工である。石質は、すべて珪質頁岩である。

b 細部調整が施された剣片で、定形的な刃部を持たない石器。いわゆるR - フレイクの類

(第6図9 第7図14・15 第11図17・19・21・25 第12図26・29～32 第16図33・37・38 第25図78～81)

aとの細分は、刃部調整が縁辺の全周の1/2以上のものをaに、未満をbにした。素材にそのまま調整剥離を加えるものと整形した後に加えるものがある。

19点出土した。石質は、すべて珪質頁岩である。

c 使用痕の見られる剥片。いわゆるU - フレイクの類

(第6図6～8 第7図11・13 第11図20・22～24 第12図27・28 第16図35・36 第26図82～89 第27図90～97)

縁辺の一部に、使用のため生じたと考えられる微細剥離をもつものを一括した。

29点出土した。石質は、すべて珪質頁岩である。

今回の調査で出土した剥片石器は、石鏃、石槍、石錐、石匙、石篋、不定形石器の6種類で、総数97点である。このほか、剥片及び石核類が約1200点出土している。このことから、本遺跡では、石器を製作した可能性が高いと考えられるが、明確な遺構は今回の調査で検出されなかった。第22図50の石槍は、北海道産の黒曜石製で、搬入されたものと考えられるが、今後科学的分析、産地同定の必要があろう。基部に抉りのある石槍は、六ヶ所村表館遺跡や青森市熊沢遺跡等で出土し、縄文時代前期のものとしてされている。本遺跡でも縄文時代前期の土器は、ごく数片ではあるが出土しているものの、本石槍の時期を特定することはできなかった。今後の資料の増加を待つものである。(後藤 久志)

第3表 石器計測表 剥片石器

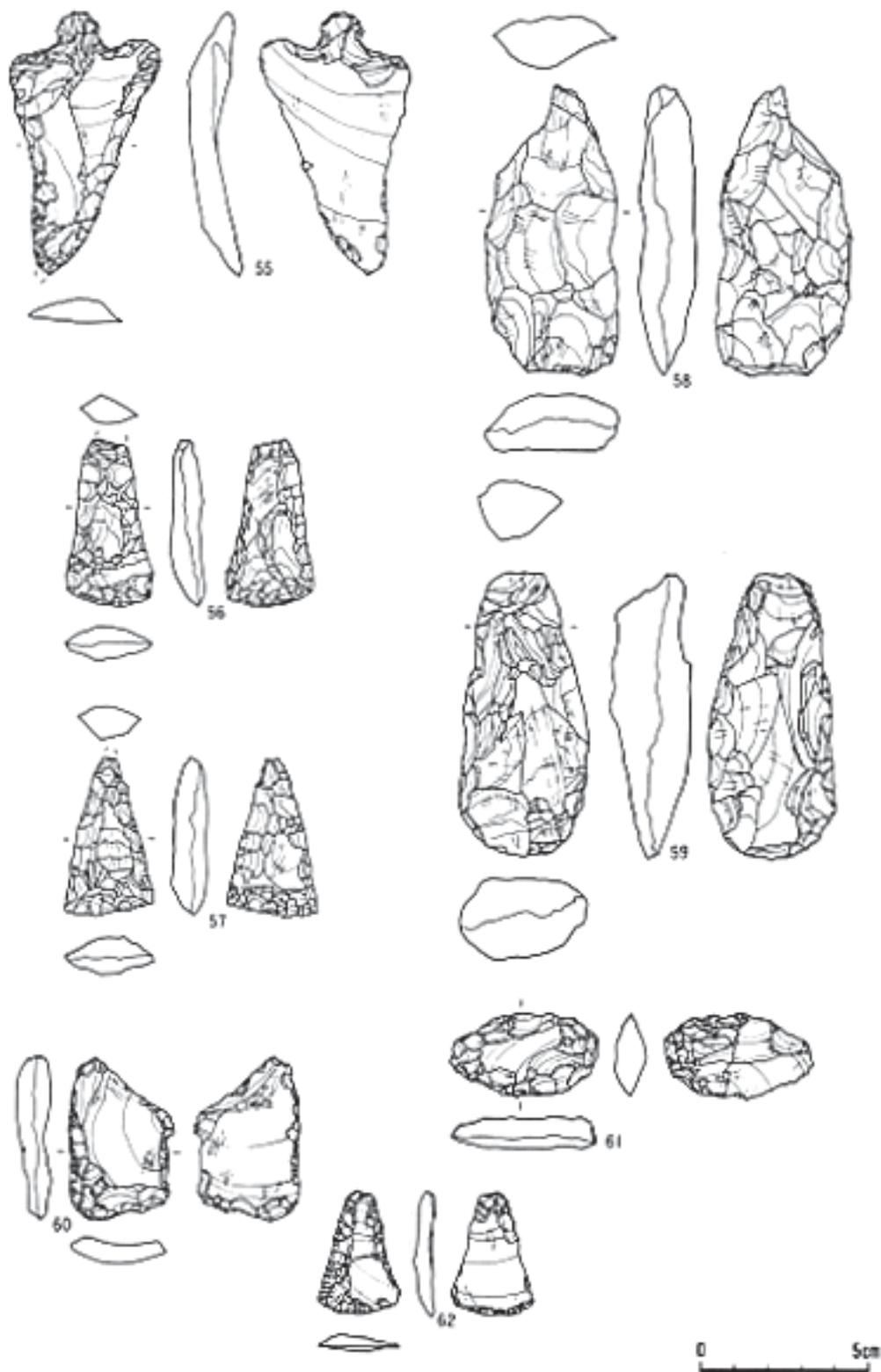
No	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	図版番号	備考	
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)					
石 鏃											
1	2H	フ	(36)	16	10	(3.0)	珪頁	Hb	6図	アスファルト付着	写
2	5土	ウ	(35)	16	8	(3.6)	ウ	ウ	11図	鏃先欠損	写
3	10土	ウ	(33)	14	7	(2.6)	ウ	ウ	ウ	ウ	写
4	16土	ウ	(45)	14	7	(3.6)	ウ	ウ	ウ	ウ	写
39	E-5	ウ	(32)	16	4	(1.7)	ウ	I	22図	ウ	写
40	C-7	ウ	(44)	14	6	(3.1)	ウ	IIa	ウ	ウ	写
41	E-10	ウ	(35)	16	6	(3.0)	ウ	ウ	ウ	鏃先、基部欠損	写
42	ウ	ウ	37	18	6	2.8	ウ	ウ	ウ	ウ	写
43	C-6	ウ	(42)	15	4	(2.0)	ウ	IIb	ウ	ウ	写
44	D-7	ウ	(28)	15	7	(2.0)	ウ	ウ	ウ	ウ	写
45	F-13	ウ	(28)	16	5	(1.7)	ウ	ウ	ウ	基部欠損	写
46	D-3	ウ	(37)	17	7	(3.0)	ウ	ウ	ウ	ウ	写
47	E-7	ウ	(29)	15	5	(2.0)	ウ	ウ	ウ	基部欠損	写
48	F-7	ウ	(28)	15	7	(2.0)	ウ	ウ	ウ	鏃先欠損	写
49	D-12	ウ	(40)	14	7	(4.0)	ウ	ウ	ウ	ウ	写
石 槍											
50	G-10	ウ-12	(95)	45	11	(41.6)	黒	a	22図	先端部欠損	写
51	表館	ウ-12	(83)	28	19	(37.8)	珪頁	b	ウ	ウ	写
52	F-13	ウ-12	43	18	7	5.0	ウ	b	ウ	ウ	写
53	D-11	ウ	(65)	24	12	(16.4)	ウ	b	ウ	先端部欠損	写
石 錐											
54	D-6	ウ-12	(35)	20	10	16.5	珪頁	ウ	22図	基部欠損	写
石 匙											
55	C-3	ウ-12	(80)	45	16	(25.7)	珪頁	ウ	23図	先端部欠損	写
石 篋											
56	D-10	ウ-12	(51)	26	(10)	(11.9)	珪頁	ウ	23図	基部欠損	写
57	A-8	ウ	(48)	27	11	(12.2)	ウ	ウ	ウ	ウ	写
58	E-7	ウ	(87)	41	17	(62.1)	ウ	ウ	ウ	ウ	写
59	F-8	ウ	80	39	25	70.5	ウ	ウ	ウ	ウ	写
不定形石器											
5	2H	フ	64	41	13	21.9	珪頁	a	6図	(P 1)	
6	2H	ウ	47	27	6	8.7	ウ	c	ウ	(P 1)	
7	2H	ウ	31	37	10	7.8	ウ	ウ	ウ	(P 6)	
8	2H	ウ	49	33	10	7.2	ウ	ウ	ウ	(P 6)	
9	2H	ウ	30	27	15	9.0	ウ	b	ウ	(P 6)	
10	3H	ウ	96	96	29	162.8	ウ	a	7図	(P 14)	
11	4H	ウ	41	28	9	8.3	ウ	c	ウ	(P 10)	
12	5H	ウ	34	50	16	22.4	ウ	a	ウ	(P 65)	
13	6H	ウ	23	31	8	4.1	ウ	c	ウ	(P 88)	
14	6H	ウ	54	46	14	29.5	ウ	b	ウ	(P 74)	
15	8H	ウ	25	62	11	10.8	ウ	ウ	ウ	(P 6)	
16	8H	ウ	70	40	17	42.9	ウ	a	ウ	(P 13)	

第4表 石器計測表 製片石器(2)

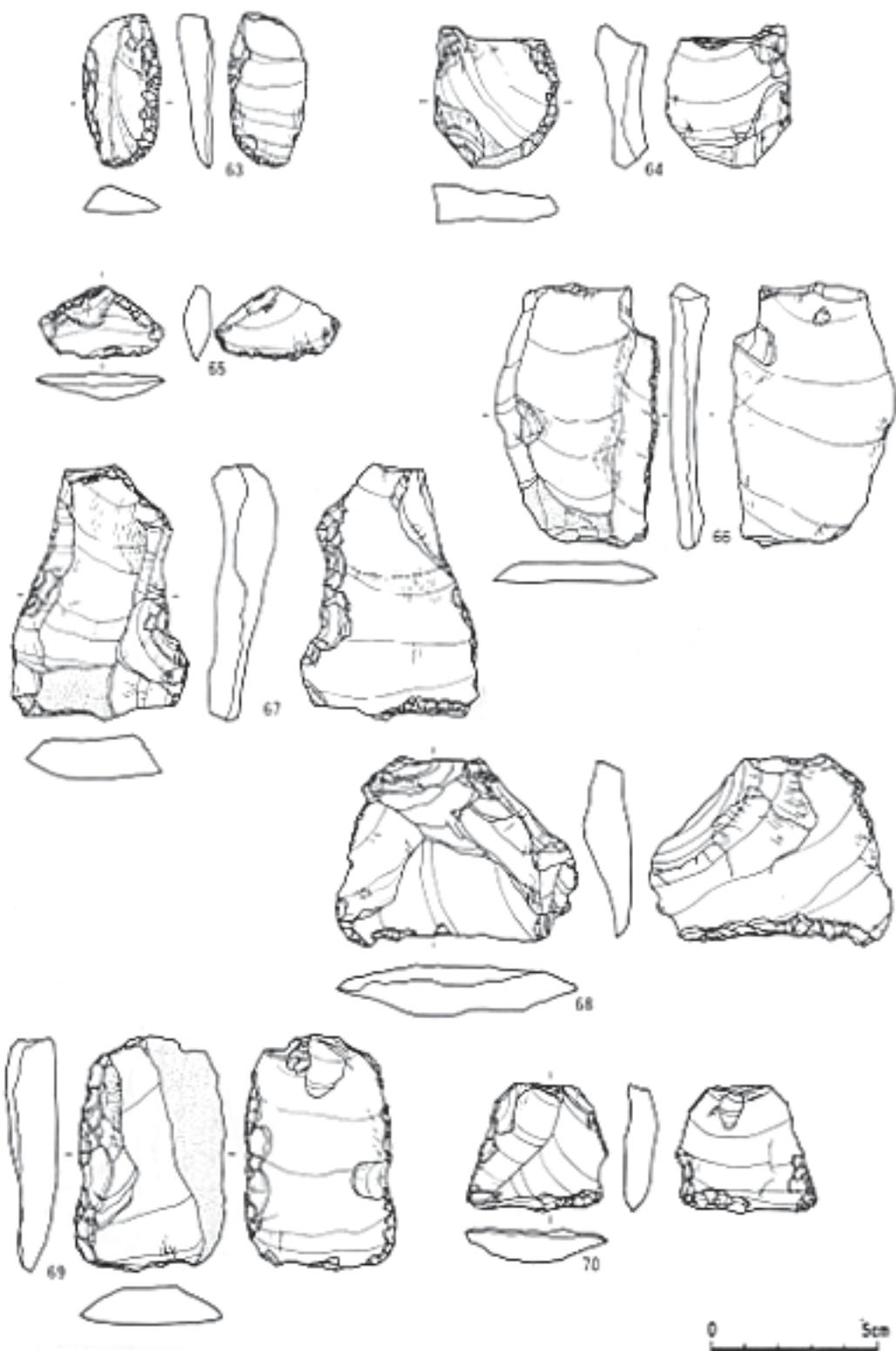
No	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	図版番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
不定型石器										
17	2土	フ	43	50	17	20.9	珪頁	b	11図	
18	3土	※	71	35	12	20.6	※	a	※	
19	3土	※	32	26	11	30.3	※	b	※	
20	5土	※	73	65	22	80.0	※	c	※	
21	5土	※	53	40	11	17.2	※	b	※	(S-1)
22	5土	床	55	59	15	28.8	※	c	※	(S-7)
23	5土	フ	69	60	21	50.2	※	※	※	(S-11)
24	12土	※	59	37	10	14.8	※	※	※	
25	13土	※	53	29	12	11.5	※	b	※	
26	16土	※	44	30	9	5.2	※	※	12図	
27	23土	※	30	28	4	2.6	※	c	※	
28	23土	※	56	33	14	18.3	※	※	※	
29	23土	※	67	40	15	27.6	※	b	※	
30	23土	※	31	17	4	2.3	※	※	※	
31	26土	※	38	42	15	26.1	※	※	※	
32	26土	※	38	47	15	35.4	※	※	※	
33	Pit 5	フ	34	24	7	3.1	珪頁	b	16図	
34	Pit 18	※	47	29	9	8.2	※	a	※	
35	Pit 18	※	68	62	15	41.0	※	c	※	
36	Pit 18	※	35	54	12	15.8	※	※	※	
37	Pit 18	※	65	29	10	15.9	※	b	※	
38	Pit 18	※	37	28	10	5.9	※	※	※	
60	F-4	D-5層	50	32	10	13.1	珪頁	a	23図	
61	C-3	※	26	45	10	10.5	※	※	※	
62	F-8	※	37	25	7	3.5	※	※	※	石質?
63	E-7	※	47	24	11	8.4	※	※	24図	
64	D-5	※	48	39	16	20.6	※	※	※	
65	B-4	※	22	38	8	4.5	※	※	※	
66	C-8	※	81	50	12	32.6	※	※	※	
67	G-10	※	78	54	21	26.5	※	※	※	
68	D-4	※	58	74	16	56.6	※	※	※	
69	D-6	※	73	46	16	50.4	※	※	※	
70	E-5	※	39	43	11	13.7	※	※	※	
71	F-7	※	67	63	16	46.7	※	※	25図	
72	表探	※	62	36	15	22.1	※	※	※	
73	D-4	D-5層	49	53	13	25.2	※	※	※	
74	C-2	※	21	38	8	5.2	※	※	※	
75	表探	(25)	45	8	8	17.0	※	※	※	
76	D-7	D-5層	(36)	12	6	12.3	※	※	※	
77	表探	(48)	23	12	12	(11.1)	※	※	※	
78	E-7	D-5層	38	18	4	1.9	※	b	※	
79	F-6	※	59	21	12	9.4	※	※	※	
80	C-5	※	86	62	20	60.5	※	※	※	
81	F-5	※	67	41	13	21.5	※	※	※	
82	C-6	※	75	30	10	19.0	※	c	26図	
83	B-6	※	67	35	14	18.3	※	※	※	
84	表探	※	67	29	11	13.8	※	※	※	
85	B-8	D-5層	58	31	13	11.9	※	※	※	
86	F-12	※	83	44	12	23.0	※	※	※	
87	C-3	※	58	59	14	32.9	※	※	※	
88	B-6	※	71	40	12	31.3	※	※	※	
89	F-12	※	77	63	18	70.5	※	※	※	
90	E-7	D-5層	37	26	11	8.2	珪頁	c	27図	
91	D-8	※	49	24	10	8.0	※	※	※	
92	F-9	※	56	42	17	23.2	※	※	※	
93	F-12	※	66	44	11	19.0	※	※	※	
94	D-8	※	75	45	13	33.0	※	※	※	
95	E-10	※	(73)	43	13	(28.5)	※	※	※	
96	表探	(72)	48	19	19	(41.6)	※	※	※	
97	F-7	D-5層	55	31	10	8.5	※	※	※	



第22回 遺構外出土遺物(6) 剥片石器(1)



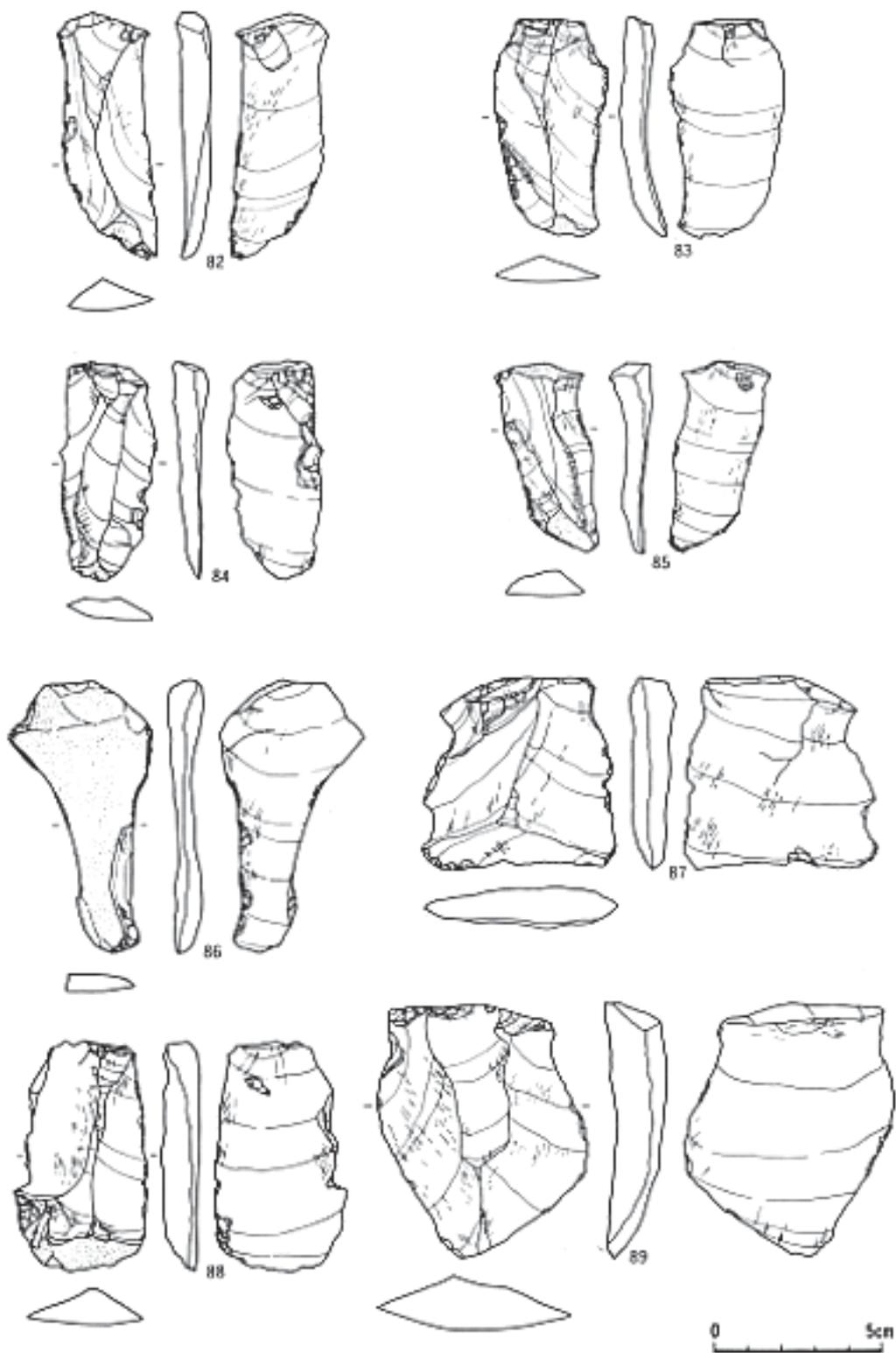
第23图 遗物外出土遺物(7) 剥片石器(2)



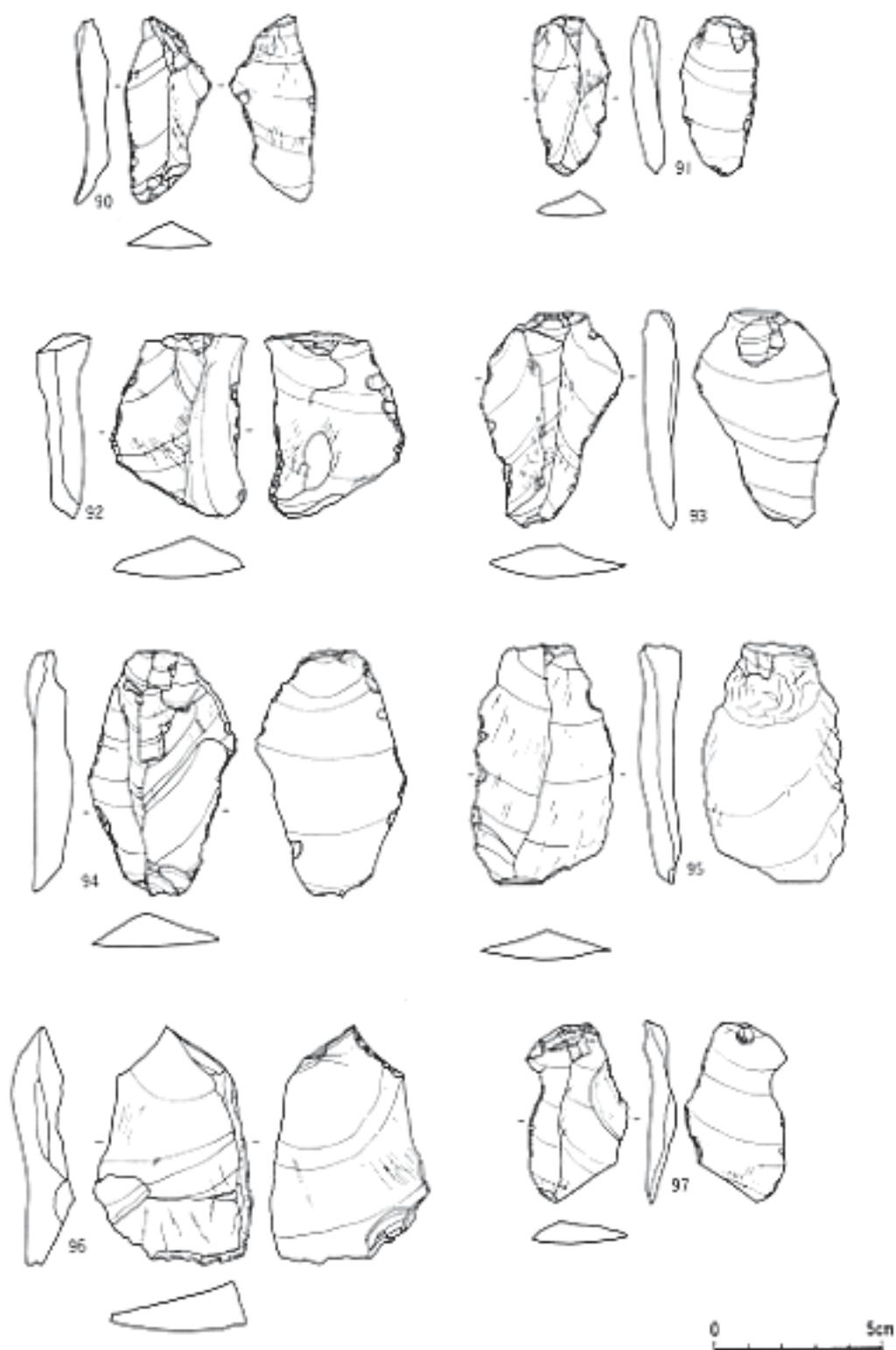
第24図 遺構外出土遺物(8) 剥片石器(3)



第25圖 遺構外出土遺物(9) 剝片石器(4)



第26回 遺構外出土遺物(10) 剥片石器(5)



第27回 遺構外出土遺物(11) 剥片石器(8)

磨製石斧（第28図）

10点出土した。遺構内出土は3点（第7図5・10 第14図9）、欠損品2点、遺構外出土7点、欠損品6点である。刃部の残存するものは、すべて両刃である。以下、本文中の番号は、整理番号であり、標題につけた図版番号は遺構外についてのみ記載した。

1は基部の破片で片面だけが残存している。全面研磨に至っておらず、一部に敲打痕があるが、これは使用による敲打痕ではなく整形時の敲打痕である。

2はほぼ完形品に近いが、片面が胴部から刃部にかけて欠損している。全面研磨に至っていない。欠損後、両端部をスリ石に転用している。

3は刃部破片であり全面研磨がなされている。敲打痕が数箇所あるが、欠損後のもので成形時の剥離の痕跡ではない。刃部は円刃であるが一方に偏っている。刃部角は65度である。

4・7は胴部破片であり、軽度の研磨がなされている。7は欠損後、敲打されこの後に側縁の一部をスリ石に使用している。

5は胴部先端から刃部にかけて残存しており、片側縁が欠損している。欠損部位は、剥離加工されており、転用された可能性が高い。刃部は円刃で、多少摩耗している。刃部角は65度である。

6・8・10は完形品である。6は長さ68mmで片面がほぼ平坦であり、刃部先端を転用している。刃部角は80度である。

8・10は刃部が直刃であり、8は長さ88mmで、10は48mmである。8は刃部端に微細な刃こぼれが見られ、両側縁部に数箇所の使用痕が見られる。8・10とも「ノミ」のような用途が考えられる。

9は基部が残存しており、丁寧な研磨がなされている。片面が平坦で、もう一方の面が湾曲しており、断面が、かまぼこ状を呈している。

スリ石（A）（第28・29・30図）

38点出土した。遺構内出土3点。機能面の位置により細分した。

A - 類 主に、平坦面を機能面として使用しているもの

18点出土した。遺構内出土は1点（第13図21）である。21は、13号土壇底面から出土したもので、両面、両側縁、両端部の6面を機能面として使用しており、特に端部が磨耗している。

33・37・41・43は楕円形の礫を素材としており平坦面全体にスリ痕が認められる。37は機能面に焼けた跡が見られ煤が付着している。

30・31・34・35・36・38・40は小型で球状又は円盤状の礫を素材としており30は両側縁を敲击潰している。46は断面形状が三角形を呈し、敲打及びスリ痕が認められる。

A - 類 主に、側縁部を機能面として使用しているもの

20点出土した。遺構内出土2点（第7図28 第13図20）である。平面形が、楕円と長方形の

礫を素材としているものにとに細分される。

20は細長い棒状を呈し、片面、片側縁にスリ痕が見られる。端部には強度の敲打痕が見られる。47・52・56は両側縁にスリ痕が見られる。52は側縁部の摩耗が少なく、むしろ機能面としてのものではなく整形のための可能性が高い。

50・60は片側縁を使用しており機能面は両端部近くまで及んでいる。

凹み石 (B) (第30・31図)

33点出土した。完形品28点、欠損品4点である。凹みを有する面の数により分類し、凹みにまで至っていない荒れもこの類としてスクリーントーンの違いにより表現した。

B - 類 1面使用のもの

10点出土した。遺構内出土2点(第13図17・19)である。素材が細長いものが1点、分厚い礫を使用しているものが2点、その他の礫は楕円と長方形を呈している。

17・67はほぼ2箇所凹みを有し、側縁部にスリ痕が認められる。

B - 類 2面使用のもの

19点出土した。遺構内出土3点(第12図13 第14図24・26)である。

平面形は小型で円形、楕円形を呈しているものが多く、円形を呈しているものは両面に1箇所の凹み、楕円形を呈しているものは、両面に2箇所の凹みが認められる。凹み部分は両面とも中央部に位置しており、凹みの痕跡も同程度のものが多い。凹み以外に使用痕が認められるのもあり、24・76は両端部に敲打痕、78は両側縁にスリ痕、79は両側縁にスリ及び敲打の複合による痕跡が認められる。

B - 類 欠損しており全体の形状がつかめないもの

4点出土した。89は凹み部分が粗雑で浅く、片側縁をスリとして使用している。

敲き石 (C) (第31・32図)

47点出土した。完形品43点、欠損品4点である。

形状はまちまちであるが、使用痕跡の位置により細分した。

C - 類 主に、平坦面を機能面として使用しているもの

24点出土した。遺構内出土5点(第7図29 第12図11 第13図18 第14図25・27)である。

27・95はやや内厚で卵型をしており、平坦面に敲打痕が認められる。

92・93・110は中央に2～3cmの円形又は細長い敲打痕が認められ、度合いが進むと凹み石に分類されるものである。いずれも2面使用している。

C - 類 主に、端部を機能面として使用しているもの

20点出土した。遺構内出土4点(第12図12・14・16 第13図15)である。

16は三角形に近い形状を呈し、1箇所の端部に敲打痕が認められる。114は一端部に敲打痕があり、かなり敲打の度合いが強い。113・126は楕円形の礫を素材としており、両端部を敲打し

ている。126は幅の狭い側の端部が、かなり敲打されている。

C - 類 主に、側縁部を機能面として使用しているもの

3点出土した。遺構内出土2点（第13図22 第14図23）である。

22は分厚い礫を素材としており一側縁に若干の敲打痕が認められる。

23は円盤状で両面、両側縁を使用しており、側縁部は敲打後に擦った痕跡が認められる。

石 皿（第32図）

10点出土した。いずれも遺構外出土であり、欠損品は2点である。

128はかなり粗雑な作りであり、裏面には、3個の瘤状の脚部が認められる。

これに対し129はかなり調整がされており面もスリにより整えられ平坦に近いものになっている。裏面は128と同様に、3個の脚部が認められ、かなり丁寧に作出されている。

133は自然礫を若干、器体整形しておりスリにより面の中央が大きく湾曲しているものである。すべて片面使用である。石質は128は安山岩、129は砂質凝灰岩、133は安山岩である。

台 石（第32図）

12点出土した。遺構内出土4点（第12図138 第13図139・140・141）である。

欠損品は10点である。

138・139・140・141は主要面にスリ及び若干の敲打による痕跡が認められるが、スリが面全体に及んでいるものは少ない。

石 棒（第32図）

8点出土した。欠損品は4点である。

形状は円柱状、又は四角柱状を呈しており先端部は丸い。150はC-3グリッドから出土したもので、四角柱状を呈しており、ほぼ平坦である。自然面か意図的なものなのかは判断しにくい。

砥 石（第32図）

1点出土した。163は長さ62mmの小型で偏平な形状を呈している。

主に、両面、両側縁を機能面としており、携帯用として使用された可能性がある。

その他の礫石器（第32図）

164は一端部に両面からの剥離痕が認められる。石錘の可能性もあるが、対する端部に剥離痕又は挟りが見られないため、その他の礫に分類した。

今回の調査で出土した礫石器は160点であり、総出土石器の割に比べ点数も多く、欠損品が非常に少ないという特徴が挙げられる。 (秋元 宏之)

凡例

緑凝→緑色凝灰岩質 凝→凝灰岩 砂凝→砂質凝灰岩質
 緑セ→緑色セランフェルス 安→安山岩 凝凝→凝灰凝灰岩質
 砂→砂岩 流→流紋岩 頁→頁岩
 セ→セランフェルス ナ→ナット 硬→硬玉

第5表 石器計測表 礫石器(1)

No	出土地点	層	最大計測値				材質	分類	図版番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
磨製石器										
1	F-9	0-1層	62	51	15	75	緑凝	第28図	基部残存	
2	F-10	0	93	62	24	209	緑セ	0	片面欠損	写
3	E-6	0	75	57	30	174	砂	0	刃部残存	
4	C-5	0	40	60	21	74	緑凝	0	基部残存	
5	I H	フ	95	48	25	129	0	第7図	刃部残存	写
6	E-10	0-1層	68	34	14	44	0	第29図	完形品	写
7	D-10	0	98	47	31	183	セ	0	基部残存	
8	D-8	0	88	31	17	78	0	0	完形品	写
9	18土	フ	52	36	17	43	0	第14図	基部残存	
10	5土	0	48	18	9	16	緑凝	第7図	完形品	写
遺跡内石器										
11	3土	フ	109	77	54	610	凝	C-I	第12図	
12	0	0	111	53	42	316	安	C-II	0	写
13	0	0	101	77	53	599	砂凝	B-II	0	
14	0	0	112	55	42	317	安	C-II	0	写
15	13土	床	103	65	45	350	0	0	第130図	
16	0	0	92	92	33	564	0	0	第12図	
17	0	0	135	70	52	802	砂凝	B-I	第13図	写
18	0	0	118	80	57	814	安	C-I	0	
19	0	フ	126	106	65	1,260	0	B-I	0	
20	0	床	111	50	47	483	砂凝	A-II	0	写
21	0	0	107	72	54	616	0	A-I	0	写
22	0	0	105	86	74	838	流	C-III	0	
23	15土	0	78	62	50	355	砂凝	0	第140図	写
24	16土	フ	95	84	52	486	0	B-II	0	写
25	18土	0	127	70	45	605	安	C-I	0	
26	20土	0	123	60	44	464	流	B-II	0	
27	22土	0	100	78	59	511	安	C-I	0	
28	4 H	0	(115)	(100)	(62)	(1,180)	流	A-II	第7図	
29	6 H	0	41	41	30	73	ナ	C-I	0	
遺跡外-スラブ石										
30	C-9	0-1層	63	53	50	226	砂凝	A-I	第28図	写
31	D-3	0	51	51	49	176	0	0	0	写
32	C-3	0	98	58	44	367	安	0	0	写
33	E-7	0	131	65	49	614	流	0	第290図	
34	表採	0	69	68	53	352	砂凝	0	第280図	
35	D-12	0-1層	80	72	48	406	安	0	0	
36	表採	0	85	68	42	355	0	0	0	
37	E-12	0-1層	155	91	51	951	0	0	第29図	スス付着
38	E-16	0	70	68	63	459	0	0	第28図	
39	E-3	0	121	78	57	779	流	0	0	
40	表採	0	(39)	67	46	268	安	0	第280図	
41	E-10	0-1層	150	79	52	873	流	0	第290図	
42	E-2	0	96	85	59	651	砂凝	0	0	
43	E-3	0	137	73	48	625	安	0	第290図	写
44	G-4	0	62	56	48	89	0	0	0	
45	表採	0	190	69	44	860	流	0	第30図	
46	G-11	0-1層	(223)	(63)	(41)	(416)	安	0	0	
47	C-9	0	116	26	36	463	砂凝	A-II	第290図	
48	F-8	0	101	84	47	591	安	0	0	
49	D-4	0	116	89	62	825	流	0	0	
50	F-6	0	117	65	48	541	安	0	第30図	
51	A-3	0	134	65	44	610	砂凝	0	0	
52	F-6	0	131	62	40	627	安	0	第29図	
53	F-12	0	142	68	39	630	0	0	0	
54	B-3	0	(90)	(80)	(39)	(365)	0	0	0	
55	表採	0	156	90	57	1,163	0	0	0	
56	A-5	0-1層	124	69	52	600	0	0	第290図	写

第6表 石器計測表 礫石器(2)

No	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	図版番号	備考
			長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)				
57	B-7	D-1層	115	69	49	626	安	A-II		
58	A-5	"	83	60	34	191	"	"	第2900	
59	C-2	"	145	63	41	591	砂凝	"		
60	B-4	"	162	71	(43)	(695)	泥	"	第2904	
61	B-5	"	139	61	44	561	"	"	"	
62	B-3	"	111	77	71	793	安	"		
63	G-4	"	(66)	(56)	(54)	(190)	"	"		
64	C-8	"	113	83	67	735	"	"		
遺構外・凹み石										
65	C-3	D-1層	152	98	60	1,340	砂凝	B-I		
66	E-5	"	105	54	38	324	"	"		
67	D-2	"	149	72	46	687	"	"	第3001	
68	B-6	"	173	75	42	770	泥	"		
69	D-4	"	98	69	49	408	安	"		
70	B-3	"	155	90	48	928	砂凝	"		
71	B-4	"	117	63	51	446	泥	"		
72	表採		(114)	(77)	(57)	(724)	安	B-III		
73	"		104	82	52	624	砂凝	B-II		
74	"		81	64	42	282	"	"	第3101	
75	"		80	72	(41)	(324)	"	"	第3004	
76	D-4	D-1層	109	64	34	302	安	"	写	
77	C-7	"	100	80	45	484	砂凝	"	写	
78	E-9	"	155	87	48	817	安	"	写	
79	F-6	"	120	52	52	812	砂凝	"		
80	表採		103	64	42	272	安	"	第3000	
81	D-3	D-1層	125	54	43	338	泥	"		
82	B-7	"	85	64	57	448	砂凝	"		
83	D-3	"	67	66	49	241	泥	"	第3100	
84	表採		122	64	44	469	泥	"	第3002	
85	"		76	49	36	168	"	"	"	
86	D-3	D-1層	71	68	48	242	砂凝	"	写	
87	E-6	"	88	71	43	253	安	"	"	
88	D-5	"	102	80	66	651	"	"		
89	表採		84	55	(42)	(236)	"	B-III	第3103	
90	"		(73)	(64)	(40)	(214)	泥	"		
91	"		(74)	(72)	(45)	(366)	安	"		
遺構外・嵌合石										
92	C-10	D-1層	127	67	52	555	安	C-I	第3200	
93	C-6	"	115	70	36	469	"	"	第3102	
94	E-6	"	112	74	53	602	泥	"	第3202	
95	D-12	"	88	68	63	522	砂凝	"	"	
96	D-10	"	151	78	53	842	安	"	写	
97	D-13	"	122	63	53	543	泥	"		
98	E-10	"	132	53	50	511	安	"		
99	B-3	"	(71)	(81)	(61)	(289)	"	"		
100	表採		90	60	40	284	泥	"		
101	E-10	D-1層	88	68	42	365	安	"		
102	D-5	"	113	50	36	291	"	"		
103	B-5	"	86	68	43	315	"	"		
104	E-6	"	114	78	39	404	泥	"		
105	"	"	89	72	52	516	安	"		
106	E-12	"	(121)	(57)	(47)	(456)	泥	"		
107	表採		86	59	42	280	"	"		
108	"		116	72	58	772	安	"		
109	"		108	59	38	355	泥	"		
110	"		109	47	27	158	泥	"	第3104	
111	C-4	D-1層	134	63	46	536	泥	C-II		
112	D-5	"	207	83	63	1,740	"	"		
113	F-10	"	136	77	46	680	安	"	第3105	

第7表 石器計測表 礫石器(3)

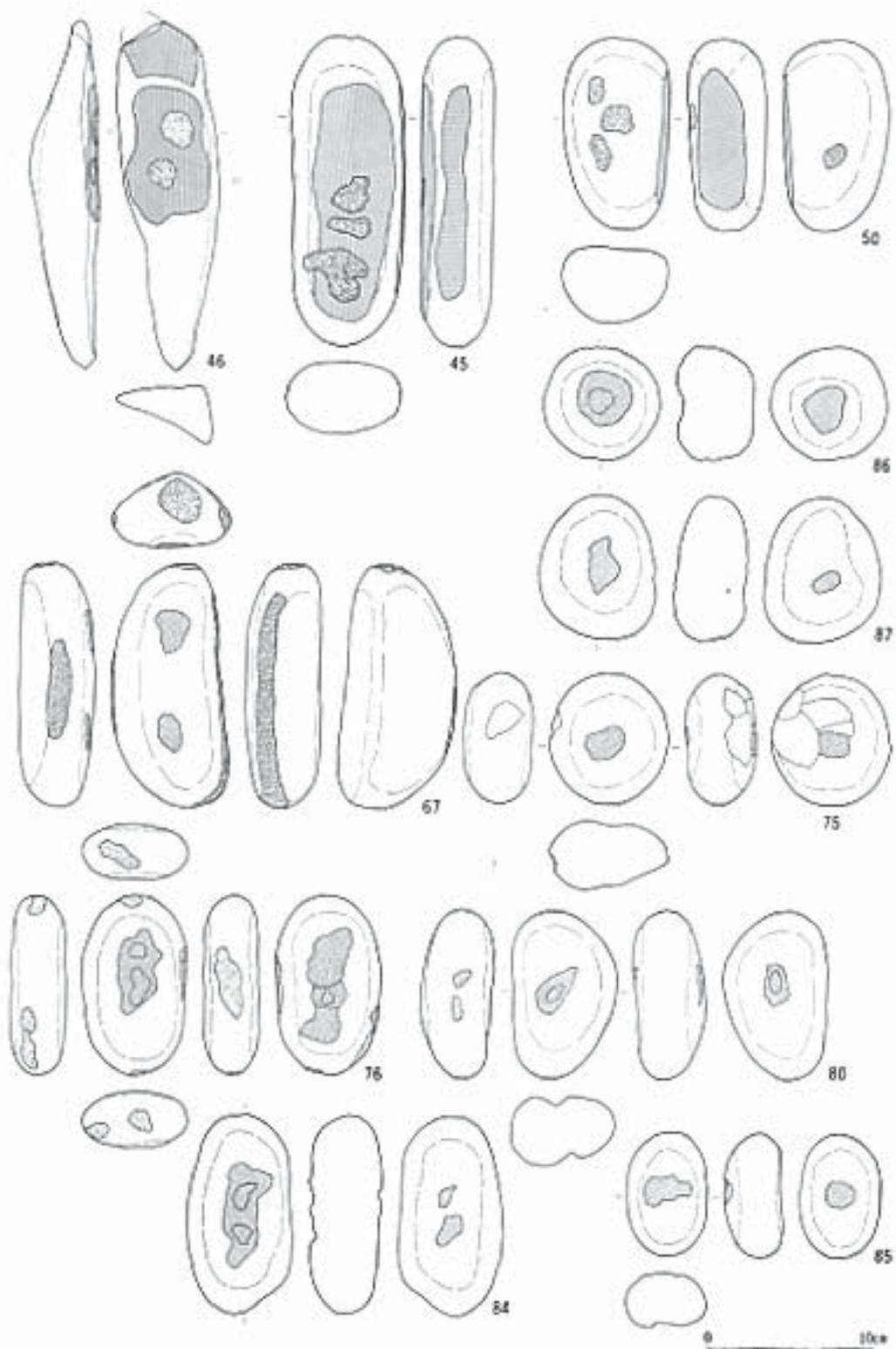
No	出土地点	層	最大計測値				石器	分類	図版番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
114	B-6	D-10	115	84	46	635	夾	C-II	第31図	
115	D-4	"	(96)	(50)	(43)	(335)	"	"	"	
116	D-5	"	160	79	70	1,320	安	"	"	
117	B-4	"	88	74	43	369	ナ	"	第31図	
118	A-3	"	142	48	47	467	夾	"	"	
119	B-1	"	136	68	47	545	"	"	"	
120	表採		(107)	(54)	(67)	(581)	安	"	"	
121	"		122	49	34	309	"	"	"	
122	"		229	91	54	1,660	夾	"	"	
123	F-8	D-10	98	73	69	750	安	"	"	
124	表採		95	66	32	302	"	"	第31図	
125	E-12	D-10	205	96	67	1,960	夾	"	"	
126	D-3	"	130	94	65	1,030	夾	"	第31図	写
127	D-10	"	100	68	52	471	安	C-III	"	
石 皿										
128	表採		190	129	59	1,620	安	石皿	第32図	
129	C-8	D-10	244	131	55	1,080	砂凝	"	"	写
130	D-5	"	159	104	68	1,300	安	"	"	
131	E-11	"	195	135	66	2,040	"	"	"	
132	表採		(96)	(73)	(22)	(169)	"	"	"	
133	F-6	D-10	340	229	86	5,100	"	"	第32図	写
134	E-10	"	255	217	103	2,420	夾	"	"	
135	D-11	"	243	159	62	4,240	安	"	"	
136	C-3	"	150	145	76	2,080	"	"	"	
137	D-4	"	(162)	(180)	(40)	(514)	"	"	"	
石 臼										
138	3土	フ	(76)	(66)	(74)	(479)	安	石臼	第32図	
139	13土	夾	(96)	(70)	(90)	(642)	"	"	第32図	
140	"	"	(96)	(81)	(80)	(520)	"	"	"	
141	13土	フ	(105)	(86)	(80)	(960)	"	"	"	写
142	表採		(109)	(100)	(44)	(800)	"	"	第32図	
143	E-4	D-10	(132)	(101)	(75)	(1,540)	夾	"	"	
144	F-7	"	(169)	(136)	(81)	(2,240)	安	"	第32図	
145	表採		(153)	(59)	(109)	(1,440)	"	"	"	
146	D-4	D-10	99	91	71	910	"	"	"	
147	B-3	"	217	100	82	1,720	"	"	"	
148	"	"	(157)	(130)	(66)	(1,830)	"	"	"	
149	"	"	(232)	(134)	(94)	(1,460)	"	"	"	
石 棒										
150	C-3	D-10	334	91	97	5,040	夾	石棒	第32図	写
151	F-7	"	300	108	(85)	(1,800)	"	"	"	
152	表採		(153)	(113)	(69)	(1,860)	安	"	"	
153	"		203	103	(72)	(2,800)	夾	"	"	
154	D-4	D-10	321	110	85	4,800	"	"	"	
155	表採		312	115	100	5,760	"	"	"	
156	"		(106)	(107)	(89)	(1,720)	"	"	"	
157	"		(86)	(63)	(64)	(520)	"	"	"	
158	E-11	D-10	78	25	7	22	頁		ペンダント	写
159	E-10	"	29	24	9	7	"		"	写
160	"	"	74	31	16	27	"		"	
161	F-11	"	17	17	16	6	硬		"	写
162	26土	フ	(54)	(35)	(24)	(64)	"		大 珠	写
砥 石										
163	表採		62	29	18	45	砥石	砥石	第32図	写
その他の礫石器										
164	C-3	D-10	90	68	(27)	(154)	砥石		第32図	写



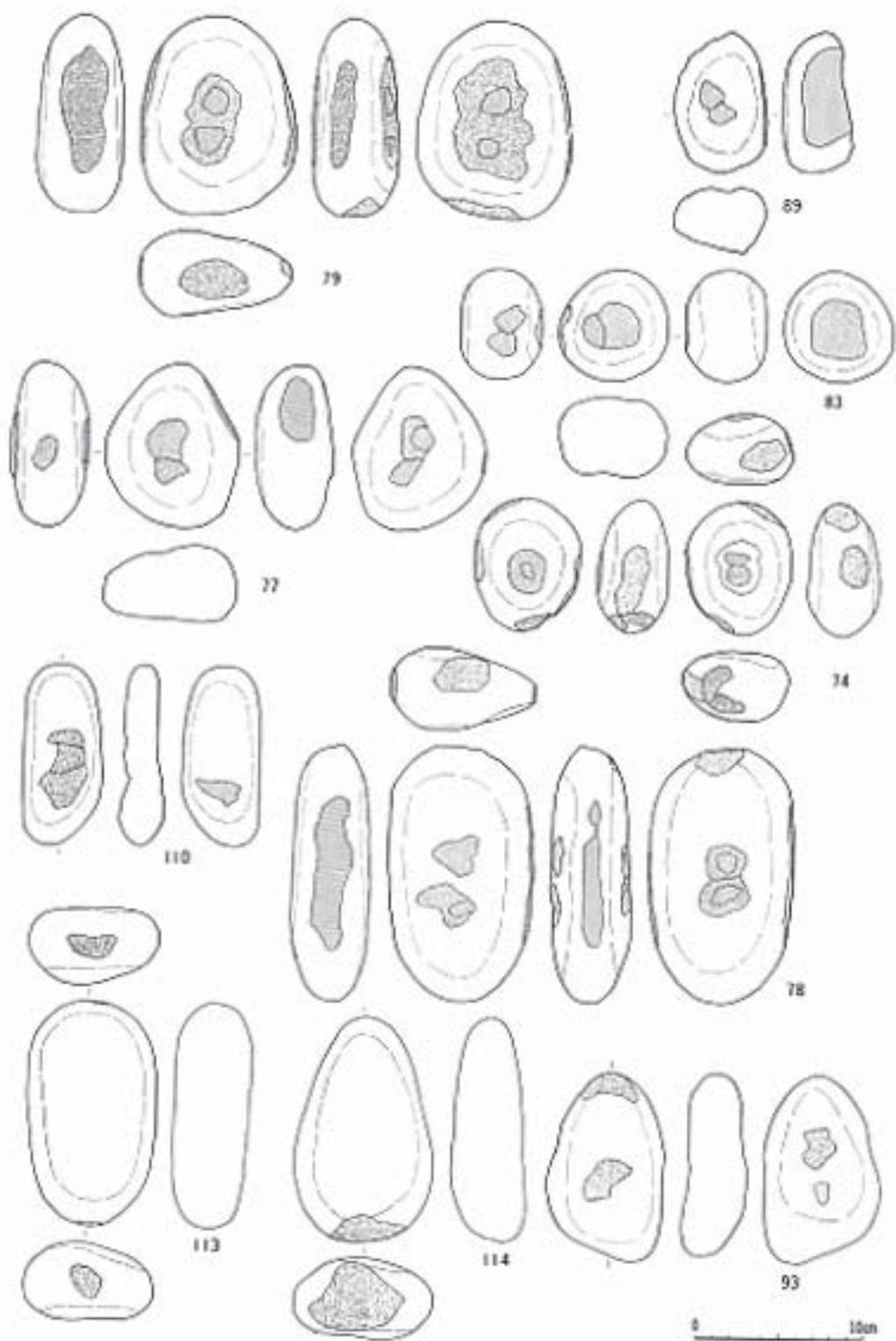
第28回 遺構外出土遺物10 礫石器(1)



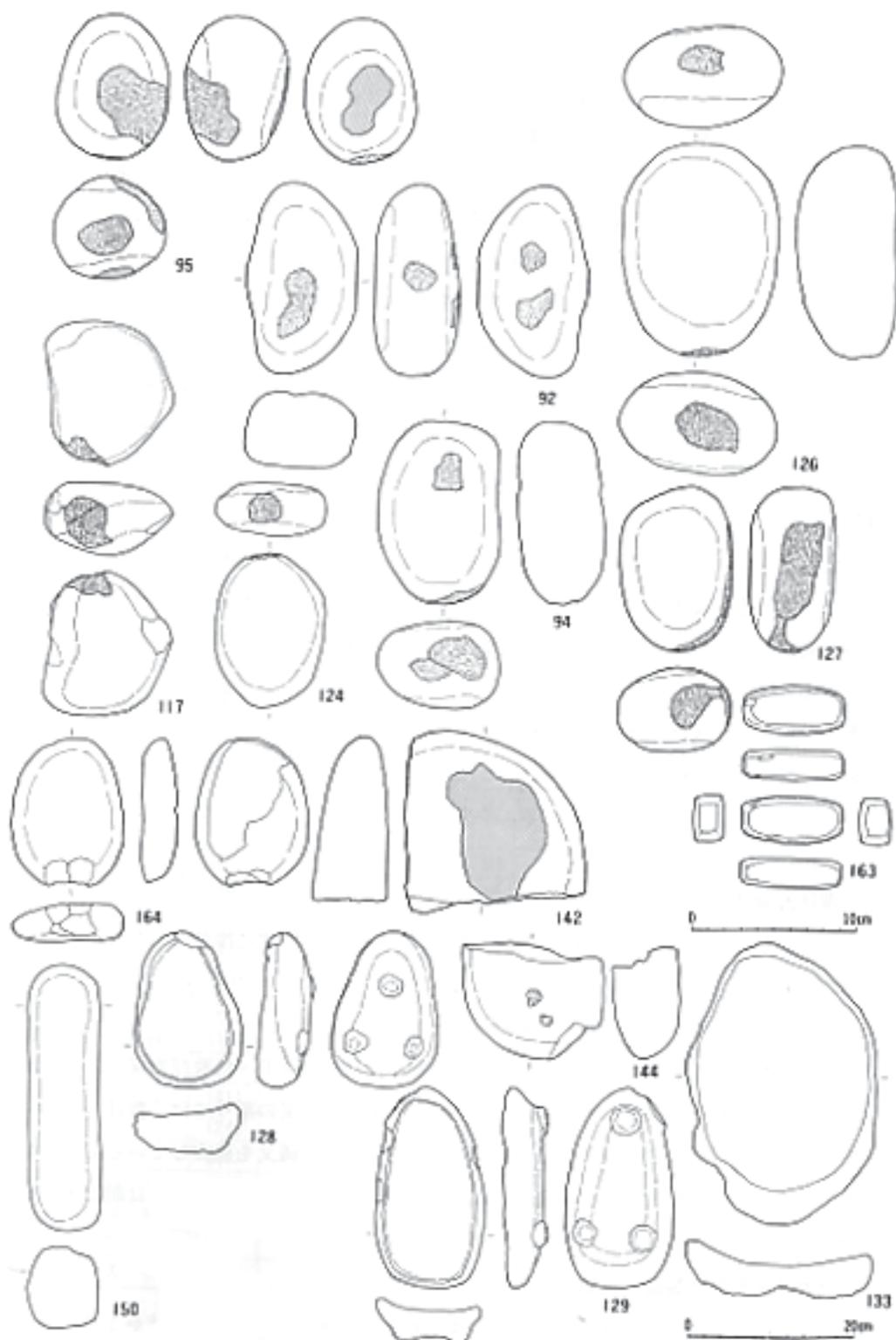
第29図 遺構外出土遺物Ⅱ 礫石器(2)



第30圖 遺構外出土遺物14 礮石器(3)



第31圖 遠橋外出土遺物(15) 礫石器(4)



第32図 遺構外出土遺物(16) 礫石器(5)

3. 土製品・石製品

土製品

(1) 土 偶 (第 33 図 1～4)

頭部 1 点、胴部 1 点、腕部 2 点、計 4 点出土した。

頭部 (1) 表採である。目、口は正面からの刺突で、鼻は盛り上げており、鼻孔を刺突で表している。頭部両側及び裏面中央に三つの瘤状の突起があり (一つは欠損)、結髪を表している。頭部から首への自然なつながり等を見ると写実的な土偶といえる。

胴部 (2) 表採である。全体の形状が写実的であるが、上記頭部とは同一個体ではない。腹部が隆起しており、その周囲に刺突が施されている。背骨に当たる位置に貫通孔があり、製作時に軸を使い製作されたと推測される。頭部及び腕部は、破損面から推測すれば、製作時には有していたと思われるが、脚部は下部の焼成面から判断すると個別に製作されたと考えられる。

腕部 (3・4) 3はE-4グリッドからの出土である。板状土偶の左腕であり、棒状に近い形を呈している。表面には正面からの刺突、裏面には横位の刺突が施されている。肩から脇にかけての製作時の貫通孔がある。4もE-4グリッドからの出土で、板状土偶の左腕である。表面から裏面へつながる縦位の6条の沈線が施文されている。

(2) 有孔土製品 (第 33 図 5・6)

2 点出土した。5はD-11グリッドからの出土で、平面形は楕円形を呈し、厚さは均一で偏平である。四つの貫通孔を「ハ」字形に有している。6は表採であり、約2分の1欠損しているが、本来円形を呈していたと思われる。中央部が盛り上がっており、中心部を片面から穿孔している。

(3) 環状土製品 (第 33 図 7)

1 点出土した。E-12グリッドからの出土であり、粘土紐を環状に接合したらしく、接合面がみられる。

(4) ミニチュア土器 (第 14 図 1 第 33 図 8～14)

17 点出土した。第 14 図 1 のみ 23 号土壙出土で、その他はグリッド一括及び表採である。本書では、分類基準を器高が 10cm 以内のものとした。土器の総出土量の割りには、数は多いといえる。底部は張り出しているものや台付もみられる。文様は斜行縄文を施文しているものが主体を占めているがこ 沈線や押圧縄文が施文されているものもある。法量等については観察表としてまとめた。

(5) 土器片再利用土製品 (第 33 図 15～18)

11 点出土した。すべてグリッド一括及び表採である。円盤状が 10 点、三角状が 1 点である。土器片は胴部のものがほとんどである。16 は穿孔途中と思われる凹みを有している。

石製品

(1) ヒスイ製品 (第14図2 第33図19)

2点出土した。2は26号土壌から出土し、約3分の1が欠損しているものの、現存長で5.4cm×3.5cmの大珠である。青森市における発掘調査では、近野遺跡に続く2例目の出土である。長方形の緒締形を呈し、長軸の一方向から穿孔されている。色は全体に白色で、部分的に緑色部がみられる。19はF-11グリッドからの出土の、半透明の緑色を呈した垂飾品である。立方体を斜めに切り落とした形を呈しており、一辺が1.7cmである。頂部寄りに一方向から穿孔されている。

(2) 有孔石製品 (第33図20・21)

2点出土した。20はE-11グリッドからの出土であり、靴篋状を呈し、器厚は均一である。全面よく研磨されており、孔は幅の狭い側の頂部寄りに両面から穿孔されている。石質は頁岩である。21はE-10グリッドからの出土で、平面形は楕円状を呈しており、全面研磨されている。長軸線上の頂部寄りに両面から穿孔されている。石質は頁岩である。

(3) その他 (第33図22)

用途不明のものが1点出土した。E-10グリッドから出土し、背鰭状の突出部を有した棒状のもので、全面がよく研磨されている。石質は頁岩である。 (上野 隆博)

第8表 ミニチュア土器観察表

図版番号	出土地点	計測値 (mm)			文 様	胎 土	焼 成	備 考
		器高	口径	底径				
第14図 1	23号土壌	(17)	—	30	縄文(LR)	良	良	
第33図 8	E-10	15	47	26	無文	〃	〃	完形品・浅鉢形
〃 9	表 採	(26)	—	(42)	縄文(LR)	〃	〃	底部張り出し
〃 10	F-9	(20)	—	31	無文	〃	〃	台付き風底部
〃 11	表 採	(19)	—	37	沈線と縄文(LR)	〃	〃	
〃 12	D-11	(24)	—	(52)	沈線と拵縄文(LR)	〃	〃	
〃 13	〃	(45)	—	30	無文	〃	〃	外面に炭化物の付着
〃 14	〃	(22)	—	27	無文	〃	〃	
実測図 無	表 採	(18)	—	(49)	縄文	〃	〃	皿形
〃	G-8	(15)	—	28	縄文	〃	〃	
〃	C-3	(41)	—	36	縄文(RL)	〃	〃	
〃	〃	(24)	—	40	縄文(RL)	〃	〃	
〃	〃	(19)	—	33	無文	不良	〃	
〃	D-11	(23)	—	(56)	無文	良	〃	
〃	表 採	(14)	—	(46)	縄文	不良	〃	
〃	D-11	(15)	—	(44)	無文	良	不良	
〃	表 採	(18)	—	(60)	無文	〃	〃	

器高の()は現存高 底径の()は測定



第33图 遺構外出土遺物(17) 土・石製品

ま と め

本遺跡は、市内南西部の標高約100mの低丘陵地上に位置する縄文時代中期（後半）の大規模な集落跡である。

検出遺構及び出土遺物の両面からみると本遺跡は、集落・捨て場・広場の三つの場から構成されていたと推察でき、平坦地には、広場を中心としそれを囲む形での土壇・住居が構築され、斜面は捨て場として利用されていたものと思われる。広場には、配石遺構が存在していた可能性が高く、柱穴群の中には、竪穴住居跡ではなくウッドサークル的な構築物を想定可能なものも考えられる。

本遺跡での遺物の総出土量は、ダンボール箱で約47箱であるが、そのうち土器は約7割を占めている。土器型式では、円筒下層d₂式から円筒上層b・c・d・e式、榎林式、最花・中の平Ⅲ式、十腰内特式等がみられ、主体をなすものは、円筒上層c・d式及び榎林式である。

剥片石器においては、石槍・石匙・筥状石器等の定形石器は非常に出土量が少ない。逆に不定形石器の出土量が多く、形態は、様々であり、多様性に富んでいる。北海道産の黒曜石製の石槍は、搬入されたものと考えれば、交流においても注目されるだろう。

礫石器においては、160点もの礫石器が出土し総出土石器の割りに比べ点数も多く、かつ欠損品が非常に少ないという特徴が挙げられる。特に石皿が総出土礫石器の割りに多いことから調査地区は、居住の場付近であった可能性が強いと思われる。

また、礫石器の他に柱状及び長楕円形の自然礫が多数出土しており、これらの一部は、石囲い炉の石材として利用されていた。これらの点から推測すると、当該地には、これらの礫を素材とした配石遺構が存在していた可能性が強い。

土製品においては、土偶、有孔・環状土製品、土器片再利用土製品、ミニチュア土器が出土したが、特にミニチュア土器は、土器の総出土量の割りに17点と数が多いこと、また、その約3分の1が配石遺構が位置しているD-11グリッドから出土していることから、配石遺構と何らかの関係があると推察できる。石製品は、ヒスイ製大珠及び垂飾品、有孔石製品等が出土したが、産地同定の化学的分析は未調査であるものの、ヒスイ製品の出土は、遠隔地との交易を思わせる。また、大珠が出土した遺跡では配石の存在の例が多いことから、本遺跡での散在していた自然礫は、配石を組んでいた可能性がある。

今回の発掘調査の実施及び本書の刊行にあたり、多くの方々から御指導・御協力をいただき、ここに深謝するとともに、今回の調査で得られた成果が市民をはじめ多くの方々に活用され、また今後の青森市の古代史解明にいささかでも一翼を担うことができれば担当者一同、望外の喜びである。

(担当者一同)

第9表 遺構と遺構内出土遺物一覧表

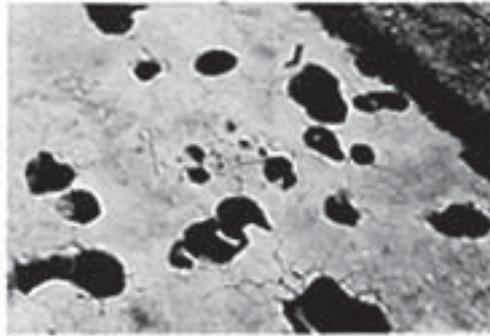
遺構名	出土遺物			備考	遺構名	出土遺物			備考
	土器	石器	土・石製品			土器	石器	土・石製品	
1H	Pr1				Pr26	細片10片	1		大木系土器
	Pr2					Pr72	Pr		
	Pr3					Pr73	Pr	1	
	Pr4	細片10片				Pr74	Pr		
	Pr5	Pr				Pr77	Pr		
	Pr6	Pr				Pr78	Pr		
	Pr7	細片10片				Pr80	Pr		
	Pr8	Pr				Pr12	Pr		
	Pr9	Pr				Pr11	Pr		
	Pr10	細片5片				Pr2	Pr		
	Pr11	Pr	1	焼製石斧		Pr6	Pr	1	
	Pr12	Pr				Pr7	Pr		
	Pr13	細片20片		模範式		Pr13	Pr	1	
	Pr14	Pr				小計	ディンバー69個分	7	3
	Pr15	Pr				2号土壇	細片5片	1	0
	Pr16	Pr				3号	Pr	2	
	Pr17	Pr				5号	Pr	5	中期後半
	Pr18	Pr				6号	Pr	5	
	Pr19	細片10片	2			12号	Pr	1	
	Pr20	Pr				13号	Pr	1	上層1式
	Pr21	Pr				15号	Pr	1	
	Pr22	Pr				16号	Pr	3	上層2式
	Pr23	Pr				17号	Pr	1	
	Pr24	Pr				18号	Pr	2	中期未葉
	Pr25	Pr				19号	Pr	1	上層2式
	Pr26	Pr				20号	Pr	1	Pr
	Pr27	Pr				21号	Pr	1	Pr
	Pr28	Pr				22号	Pr	1	ミニチュア土器
	Pr29	Pr		4目の柱式としても測定		23号	Pr	4	1
	Pr30	Pr				26号	Pr	2	1
	Pr31	Pr				小計	ディンバー18個分	19	22
	Pr32	Pr	1	5号目(中期末)		配石遺構	細片30片		
	Pr33	Pr		2号目(焼製石斧)		小ピットPr35		1	
	Pr34	Pr		3号目(出土遺物なし)		小計	Pr	5	9目の柱式?
	Pr35	Pr				6号	Pr	6	0
	Pr36	Pr				Pr26	細片2片		

3～8目の小ピットは遺物の出たものだけ記載 数字は個数

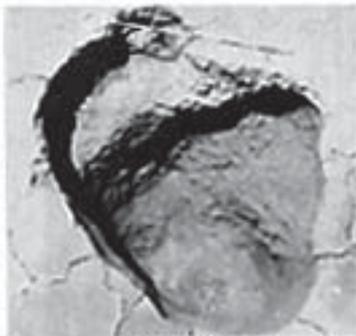
写真図版



Fig 1 調査区全景



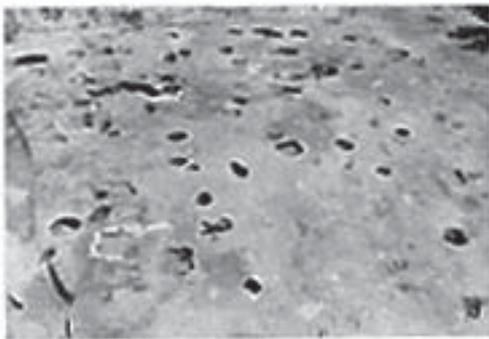
第1号型穴住居跡



第2号型穴住居跡Pit 3



第2号型穴住居跡Pit 5(右)-Pit 6(左)



第3-8号型穴住居跡(W→E)



第2号石囲炉(5H)



第1号石囲炉(3H)



第3号石囲炉(6H)

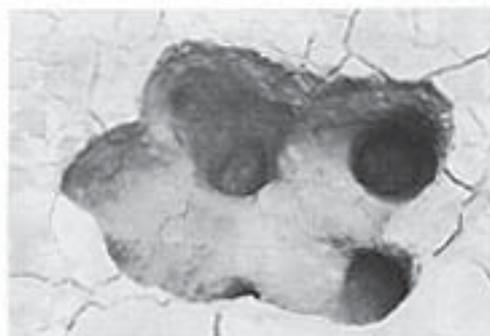


第5号石囲炉(4H)

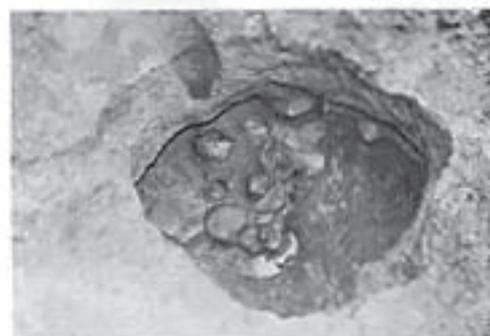
Fig 2 検出遺構1)



第3号土壤



第12号土壤



第13号土壤



第19-22号土壤



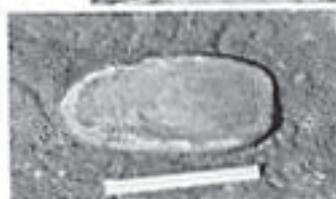
第4号石田炉



配石遺構



配石(D-5-6)



石田出土状況(C-8)

Fig 3 検出遺構②

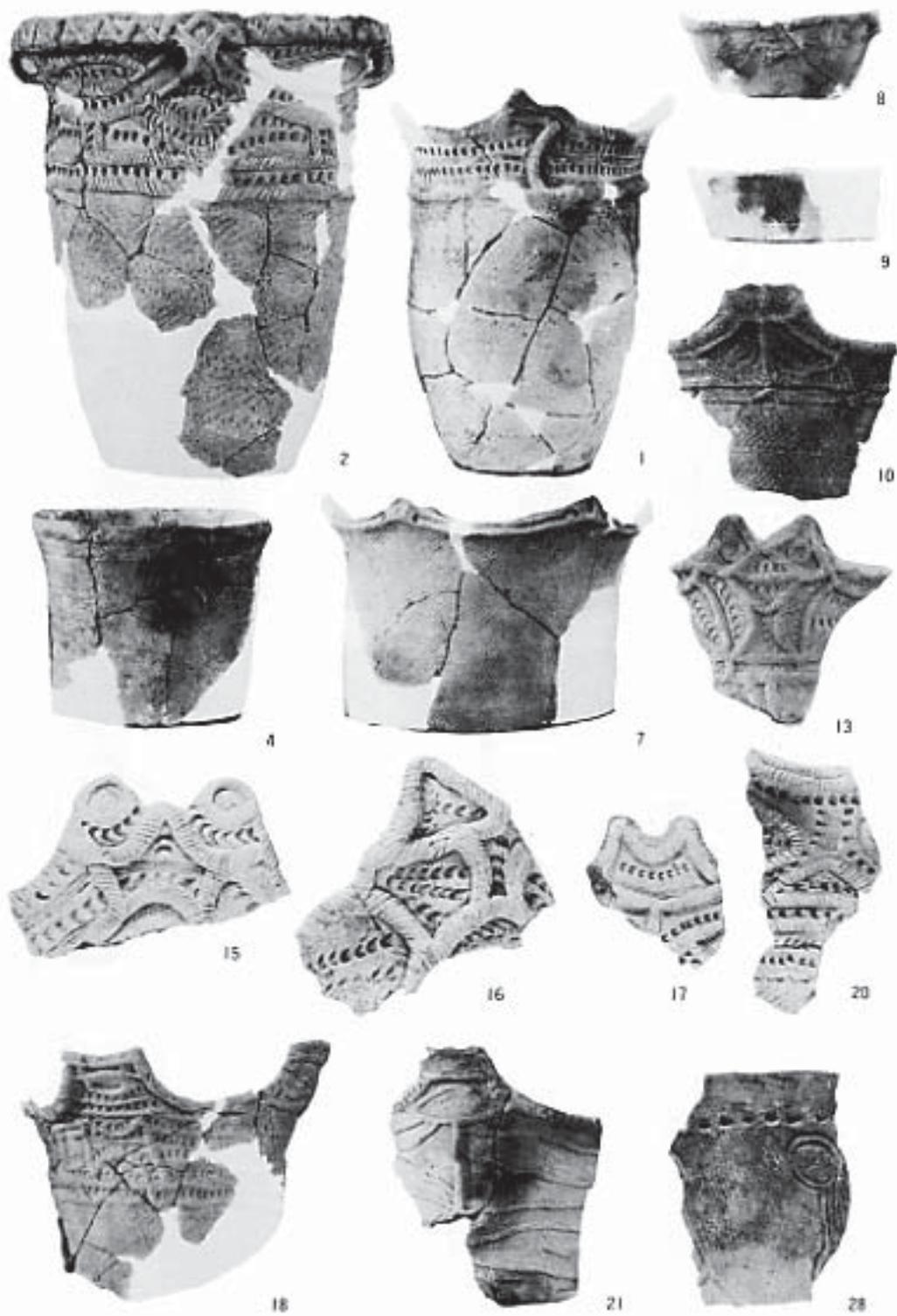


Fig 4 土器(1)



Fig 5 土器(2)・土製品

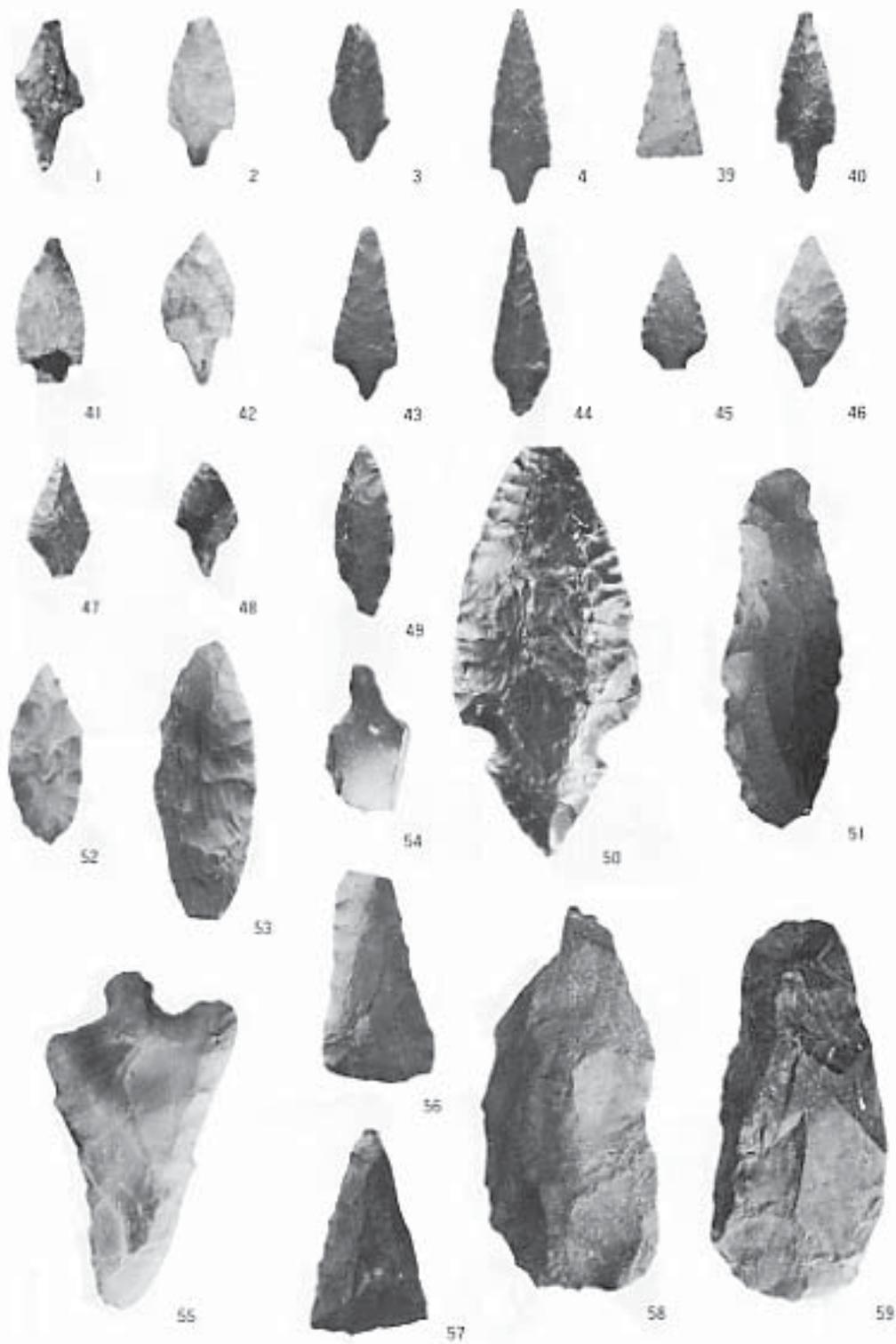


Fig 6 制片石器

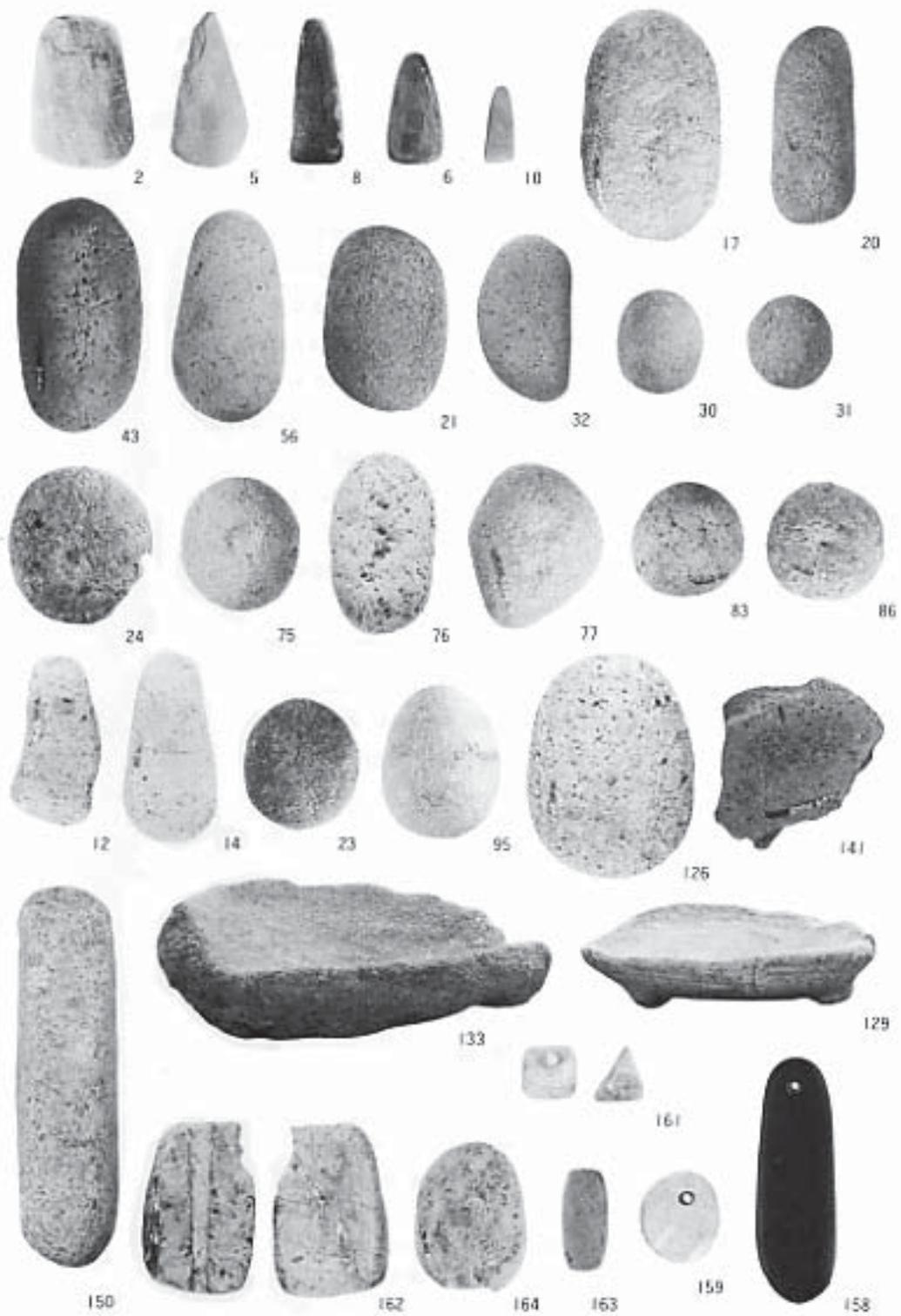


Fig 7 礫石器・石製品

本報告書の埋蔵文化財関係図書としての取り扱い。

青森市教育委員では、これまで、昭和37年度に『三内霊園遺跡調査概報』を埋蔵文化財関係の発掘調査報告書の第1号として刊行し、以後以下のとおり今日まで15冊の発掘調査報告書を順次刊行してきた。本報告書は、第1号の刊行から数え16冊目となる。

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	□ 1962 『三内霊園遺跡調査枚報』
〃	2	□ 1965 『四ッ石遺跡調査概報』
〃	3	□ 1967 『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	□ 1970 『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	□ 1971 『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	□ 1971 『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	□ 1971 『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	□ 1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』
		□ □ 1979 『蛭沢遺跡』
		□ □ 1983 『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983 『山野峠遺跡』
〃		1985 『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1986 『横内城跡発掘調査報告書』
〃		1988 『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書第16集

山 吹(1) 遺 跡 発 掘 調 査 報 告 書

発行年月日	平成3年3月30日
発 行	青森市教育委員会 〒030 青森市中央一丁目22-5 TEL 0177-34-1111
印 刷	青森オフセット印刷株式会社 〒030 青森市本町二丁目11-16 □TEL 0177-75-1431
